西條八十
西川勉
共編

日本童謠選集

1921

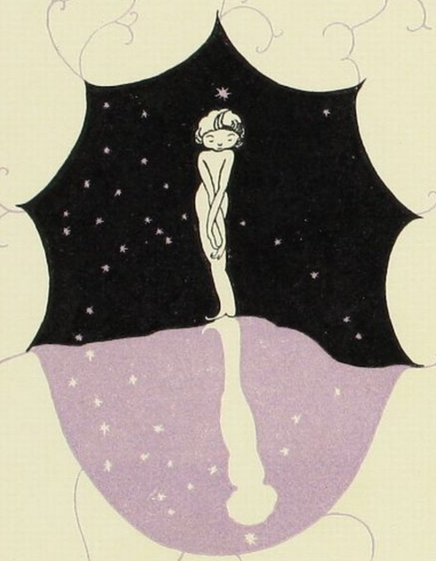
東京 稻門堂書店 發行

日本童謠選集

日本皇室御譜

日本童謡選集

西條八十
西川千雅子
井手
編



1921
福音書店

歸雁　野口雨情作　本居長世曲

お山の大將　西條八十作　本居長世曲

雨　北原白秋作　成田爲三曲

歸　雁

野口雨情作
本居長世曲

Allegretto

p

mf

がんがかへる　がんがかへる　がんが　がんが　か　へ

mf

る　　たすきに　ならんで　がーんが　かへーる

p

やまが　あれた

p

rit-erdando

f

うみが　あれた　かぜで　かぜで　あれーた

f

a tempo.

f

rit

おびになって　ひもになって　がんが　がんが

a tempo.

f

か　へる

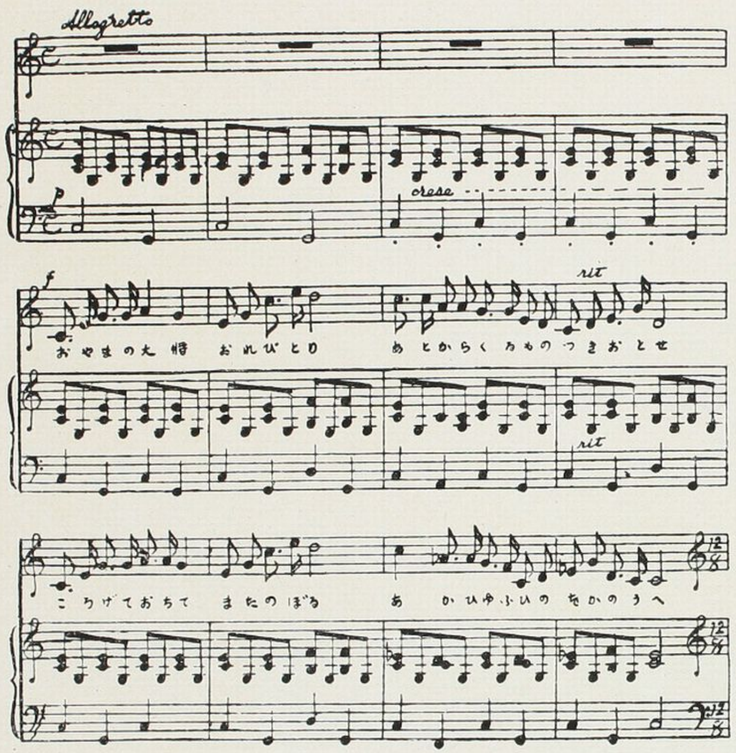
p

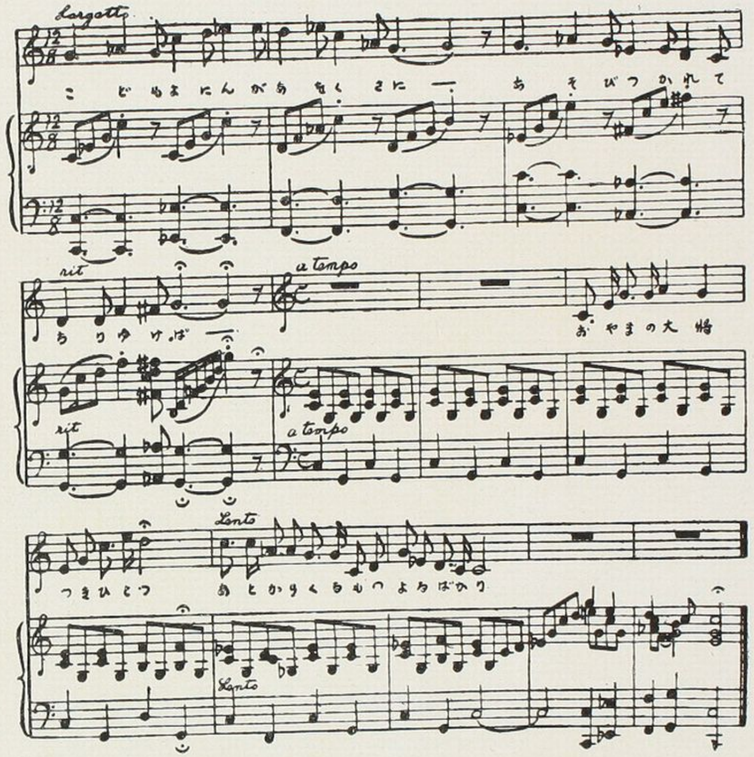
a tempo.

f

お山の大将

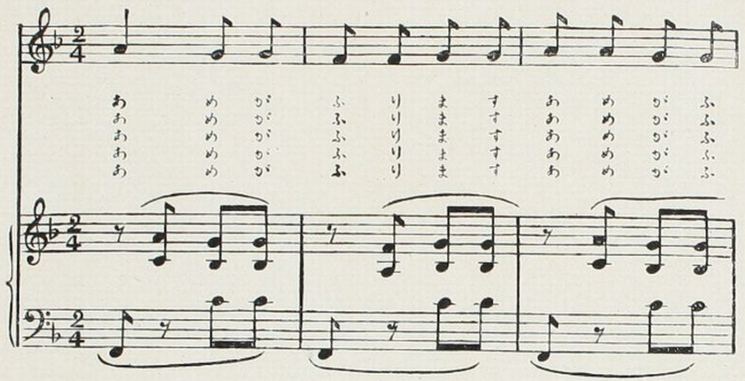
西條八十作
本居長世曲

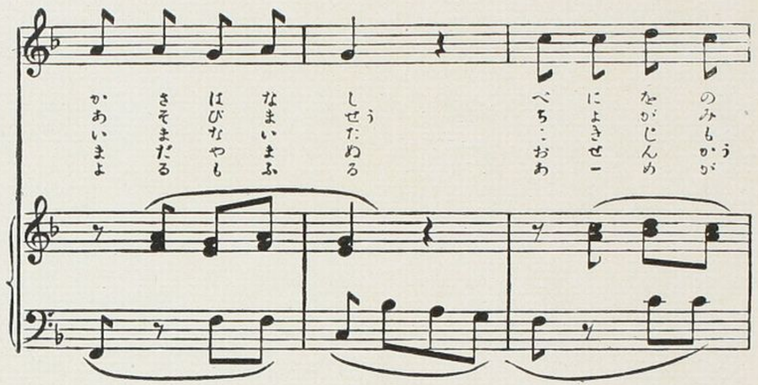


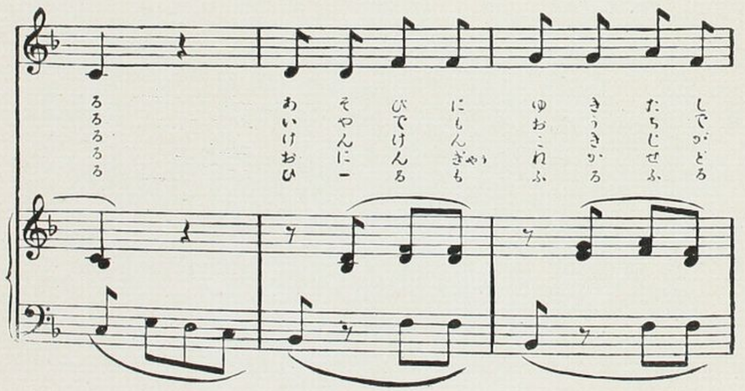


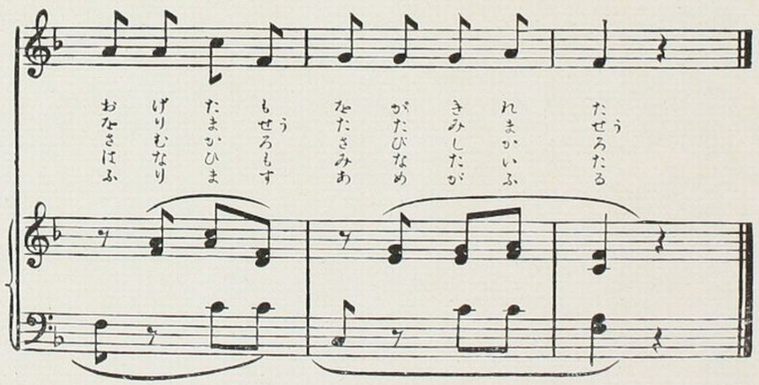
雨

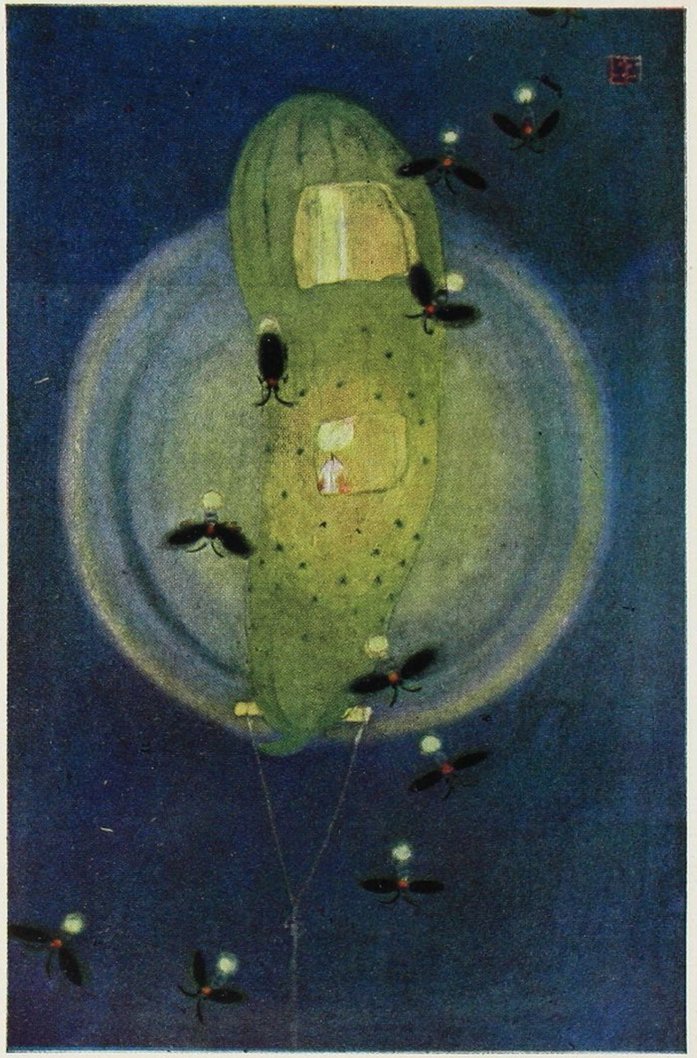
北原白秋作
成田爲三曲











日本童謠選集

童謠の比較研究

（英國の童謠に就て）

西條八十

英國の兒童等にひろく愛誦されてゐる歌謠には、まづ有名な「マザー・グース」がある。併しこれは作者の不明な、且內容よりも寧ろそれを操る節調に大部分の興味が繫がれるものであつて、藝術的に兎角の論議をすべき謠ではない。それに次ではルディヤード・キプリングの例の「ヂャングル・ブツク」中の詩、及び最近ではヂー・ケー・チエスタトンの「ザ・ロード・ツ・ラウンド・アバウト」や、スターヂ・ムーアの「ザ・リツル・スクール」などの詩人の諸作が殊に愛好されてゐると聞く。なほこの他テニスン、ブラウニング、ワヅワース等古來の詩人の作中にも童謠、乃至童謠と見做

し得べきものを屢々發見する。

併し嚴密な意味での童謠、即ち兒童の心境をかなり深くまで滲透して歌つた藝術的作品としては、第一にかのロバート・ルイス・スティーヴンソン (Robert Louis Stevenson) の六十六篇の童謠を收めた「子供の唄の園」(A Child's Garden Of Verses) に指を屈すべきであらう。

吾人がこの集を通讀して最も强い感動を受けるのは、スティーヴンソンが如何にも豐潤な想像力を以て世の兒童等のあくがれの對象を捉へてゐることである。この中には四季を通じての樣々な自然及び人事に對しての兒童の心持が變化多く歌はれてゐるが、その大部分に於て彼が表さうと試みてゐるのは兒童等がその在住してゐる世界よりも一層廣い世界に對する思慕、未知の鄕土に到達せんとする冒險的好奇の心である。私はいまそのいい例證として、「見知らぬ國」(Foreign Lands) と、「お話の本の國」(The Land Of Story-Books) とを左に譯出して見よう。

見知らぬ國

小さい僕でなけりや
誰もこの櫻の樹へは攀れまい
僕は兩手で幹をつかまへ
知らない國を眺めた。

お隣りの庭が花でかざられて
僕の眼のまへにある、
それから見たこともない
たくさんないいところが。

川が漣をたててながれ
青い空が鏡のやうに見える、
埃の途がつづいて
人がみんな町の方へ歩いてゆく。

もつと高い樹があれば
もつと遠くが見えるのになあ
川がだんだん大きくなつて
海の船の間へ流れ込むところも。

また兩方の途が
お伽噺の國へつづいて
そこでは子供たちが五時にご飯を喰べ

玩具が生きて動いてゐるところも見えるのになあ。

お話の本の國

夜、ランプが灯り
お父さんやお母さんが爐のそばに坐り
みんなが家の中で話したり歌つたりするだけで
なんにもして遊ばないとき。

ぼくは小ちやな鐵砲を手に
壁のかげのくらやみを這つて
森のこちみをぐるりと
寢椅子のうしろへと忍んでゆきます。

そこの、誰にも見つからない
夜の野營のなかで
ぼくはねるときまで
讀んだご本の眞似をしてあそびます。

これが山で、これが森、
これがぼくの居る星の寒い荒野です。
それからこれが河で
この岸にはライオンが唸りながら水をのみに來ます。

みんなの居るところが遠く
燈火のついた野營のやうに見えます、

ぼくは印度人の斥候のやうに
そのまはりをぐるぐる歩くのです。

やがて婆やがお迎ひにくると
ぼくは海を越えておうちへ歸ります、
なつかしいお話の本の國をふりかへり、ふりかへり、
臥床へはひります。

櫻の梢に攀つた子供が、すこしでも高い枝にとり縋つて一寸でもよい遠い未知の鄉を窺ひ知りたいといふあくがれの心持、また夜、暗い寢椅子の小蔭を、繪本さながらの異域に擬へて、そこに玩具の鐵砲を抱いて横はる小兒の冒險、好奇の氣分は、いづれもステイーヴンソンの童謠の持つ傾向の代表的なものである。なほこれ以外、椅子を積み上げて船になぞらへ、海洋の航海を夢みる「よき遊び」(A Good Play) と云ふ

のや、細雨のなかにオルガンの音を聞いて遠い異國の子等の歌聲を偲ぶ「唄」(Singing)と云ふのや、青草の野の鞦韆に海賊船を眞似る「海賊物語」(Pirate Story)と言ふのやかうした傾向の作品は殆んど枚擧に暇の無いほど、彼の集中に見出される。

ステイーヴンソンの童謠の特色が、かく小兒の心の思慕好奇の姿を巧みに捉へてゐるのとよき對照をなして、小兒の胸に潜む小さき懊惱をその作品中に奇しくもヴイヴイツドに體現してゐる者に、ロオレンス・アルマタデマ(Laurence Alma-Tadema)女史がある。女史は數年前物故した英國畫家サー・ローレンス・アルマタデマの實姉である。女史の童謠は數はさまで多からぬが、いかにも女性的な纖鋭な筆で、小兒の或る瞬間の心の動きを如實に寫してゐる、その情緒の優婉可憐といふ點に於ては、おなじ閨秀のクリステイナ・ロセツチ女史などと軌を一にしてゐるが、少くともその感觸の鋭さに於ては、優に後者を凌駕してゐる。左にその最も代表的と想はれる二篇を譯して見よう。中でも「ロンドンで」(In London)は都會に生活する富豪の小兒の哀愁を、又「誰もあたしをお嫁に貰つてくれなかつたら、」(If No One Ever Marries Me)は

不縹緻な女の子の人知れぬ小さき憂悶を稍ユーモラスに歌つたものである。

ロンドンで

公園の樹は埃だらけ
草は灰色に、ひからびてゐる
ノアのお舟に似た貝を貰つたのはうれしいけど
都にゐるのは悲しい。

よその大勢の子供たちは
僕のやうにおかねもちぢやない、
けれど、ああ、僕はおもちやを皆遣つてもいい
もし濱邊の貝をくれるなら。

誰もあたしをお嫁に貰つてくれなかつたら

誰もあたしをお嫁に貰つてくれなかつたら、
——だつてさうかも知れないわ、
ばあやはあたしをぶきりやうだつて言ふし
それにおとなしくも無いつて言ふんですもの。

誰もあたしをお嫁に貰つてくれなかつたら、
——でもかまやしない、
あたしは籠に入つた栗鼠と
それから小ちやい兎の小屋を購ふの。

あたしは森のそばに家をたて、
あたしだけ乗る小馬と、
それから町へつれてゆける
きれいな、おとなしい小羊を飼ふの。

そして、あたしがほんたうに大人になつたら
——さう、二十八か九になつたら——
あたしは小ちやい親無し娘を購つてきて
あたしの子にしてそだてるの。

おなじ閨秀のクリステイナ・ロセッテイ女史(Christina Rossetti)には、可憐な童謡の作が百餘篇ある。さうしてこれらは「うたひ唄」(Sing-Song)と云ふ題下に總括されてゐて、"Rhymes dedicated without permission of the baby who suggested them" と云ふ優し

い傍註がついてゐる。女史は誰も知るごとく、美しい淑かな女性で、絶えず病がちで家にとぢ籠り熱烈な信仰に頼つて生涯を清い孤獨で終つた人だけに、その童謡のどこを見ても清らかな愛が泉のやうに漲り溢れてゐるのが感ぜられる。子供の生活を歌つてもどこかその子供の背後にはひとりの母親が佇んでゐる。雨にぬれた薔薇が息づくやうな、しつとりした母の呼吸がそことなく感ぜられる、――さうした一種の溫い、清々しい母愛を讀む人に覺えしめるのがクリスティナ・ロゼッチ女史の童謡の特色である。

代表的なものとは云へぬかも知れぬが、手もとの譯謡數篇を掲げてみる。

人形

鐘はそろつて鳴つてゐた、
鳥もそろつて歌つてた、
モリイがこはれた人形の

ひとつに集めて
仲よくさせたい。

カーテン

母さんの寢臺にや
眞紅なカーテン、
ふわふわ、柔かい
絹のカーテン。

あたしの寢臺にや
冷たい、まつ白なカーテン、
だつてあたしは

そばに坐つて泣いたとき。

おお、ばかなモリイよ。

おまへがこはれた人形の
そばでしくしく泣くときに
鐘はそろつて鳴つてゐる
鳥はそろつて歌つてる。

母と子

母さんの無い子と
子の無い母さん、

あかんぼですもの。

風

誰が風を見たでせう？
僕もあなたも見やしない、
けれど木の葉を顫はせて
風は通りぬけてゆく。

誰が風を見たでせう？
あなたも僕も見やしない、
けれど樹立が頭をさげて
風は通りすぎてゆく。

總じてクリステイナ・ロセツチ女史の童謠は、前に擧げた人々よりもその韻律に重きを置いてあるので、優れたものほど邦譯が困難である。さうして歌はれてある題材も前二者から見ると遙か大人向きである。概念や敎訓があまり露骨に示されてゐる場合が屢々ある。これを嚴密に云へば女史の童謠の大半は、母謠の範圍に入れて然るべきであらう。

なほ以上の童謠作家に次いで、小兒の本然の鄕愁を更に詩的に、更に濃い夢幻的色彩を以て現はしてゐる現代の英國詩人に、ウオータ・デイ・ラ・メーヤ(Walter De La Mare)がある。氏には「幼年の歌」(Songs of Childhood)と「孔雀のパイ」(Peacock-pie)の二つの童謠集がある。その詩風はステイーヴンソンのやうにかなり複雜な兒童の心理、その憧憬好奇の心を捉へてゐるが、彼がどこまでも現實的、男性的である處に於て、此は夢幻的、女性的である。即ちステイーヴンソンの謠の中に出てくる兒童等

の幻想は、大抵の場合、後で覺めて見出す現實の背景を持つてゐるが、(たとへば "My Bed Is A Boat" や、"The Land Of Counterpane" の如き)、デイ・ラ・メーヤの作中の兒童はほとんど現實と夢の境界を知つてゐない。從つてフエイヤリ、食人鬼(オーグル)、妖婆、などと云ふものは氏の童謠中の隨處に現れてくる。即ち氏は今まで擧げた作家中で、最も童話的要素を多分に備へた童謠詩人であると云へる。然してステイーヴンソンの謠の中の兒童が多くは活潑で、男性的、冒險的で、さながら嘻々として日光の中に飜へる新鮮な嫩葉を聯想させるに反し、デイ・ラ・メーヤの歌ふ兒童等は、飽迄も靜かで、物思はしげで、蒼白い月光の下の白い浮藻の花を偲ばせるやうなところにその特色を有してゐる。

又デイ・ラ・メーヤは嘗てその親友にして、夭折せる若き詩人のルパート・ブルツクを論じた一小著の中で自らの態度を語つてゐるやうに、人間の魂のうちに永遠の兒童性のあることを信じてゐる詩人である。從つてその童謠中には兒童の心を假りて人類一般の悠久に對する止み難き思慕を歌つたものが多い。總じて彼の童謠は、兒童

に與へるものとしては、やや憂鬱に過ぎるが、その清澄な幻想はたしかに無限の一角を覗いてゐる。

いまその特色の窺はれるものを二三篇譯出してみると、——

馬に乘つた人

馬に乘つたひとが
丘を越えてゆくのを聞いた、
月はあかるく輝き
夜は靜かだつた。
その人の冑は銀、
顏は蒼白めてゐた。
そして乘つてる馬は

象牙だつた。

おとむらひ

みんなは僕らに喪服をきせた、
スウザンと、トムと、僕とに——
それから、
樹の枝が空にそびえ
雛菊や毛莨が咲いてゐる
なにもかも美しい野原を歩きながら、
僕らは雲のなかで
雲雀が囀るのを聞いた。——

——「孔雀のパイ」——

裏服をきたまま。

みんなは僕らをお墓へ伴れてつた、
スウザンと、トムと、僕と、
そこには長い草と
白楊が生えてゐた。
僕らは立つて、眺めてゐた。すると風が
そつと空から吹いてきて
僕のすぐ傍の
スウザンの髪の毛をそよがせた。

僕らは野原を歸つてきた、
トムと、スウザンと、僕と、

それから僕らは子供部屋に集つて
お茶をのんだ。
僕が窓からそとを見ると
鶫のうたふのが聞えた。
けれどトムは椅子の上で眠込んでしまつた、
かはいさうに、ずゐぶん疲れたと見えて。

かくれんぼ

かくれんぼしやう、と風が云ふ、
森の蔭で。
かくれんぼしやう、と月が云ふ、

棒の芽に。
かくれんぼしやう、と雲が云ふ、
星から星へ。
かくれんぼしやう、と波が云ふ、
港の洲で
かくれんぼしやう、と私が云ふ、
自分自身に、そして
「目覺」の夢から
「眠り」の夢へと歩み入る。

——「孔雀のバイ」——

デイ・ラ・メーヤの童謡の優れたものは、寧ろこれら短いものより長いのに多い。

「私は三人の、妖婆を見た」(I Saw Three Witches)といふ曇り空を箒に跨つて飛んでゆく妖婆の幻想を歌つたものや、森の中の猿のやうな「小人」(Dwarf)を歌つたものや、夕陽の赤い光の褪せた廢墟の甃石の上に、龜蟒のやうに啼きながら、やがては靜かな月光を浴びて踊りくるふ小さい妖精たちを歌つたもの(The Ruin)など、その作中には極めて愛誦すべきものが多い。

さて以上簡略に近代英國童謡詩人の主だつた人々及びその作風を紹介したが、このほか二流三流の童謡詩人、——單に兒童に歌はせるための所謂"Child-Rhymes"や"Verses For Children"を書いてゐる人々を數へる段になつたら、それこそ枚擧に遑が無からう。

ところでこれら英國詩人たちの童謡を、味讀した後で、現時我國の諸詩人の作にかかる童謡を讀むと、そこにはかなりの物足りなさを感ぜずにはゐられない。即ちかれらの作品に較べて我國の詩人のそれは、格調に於ては優るとも決して劣つてゐないが

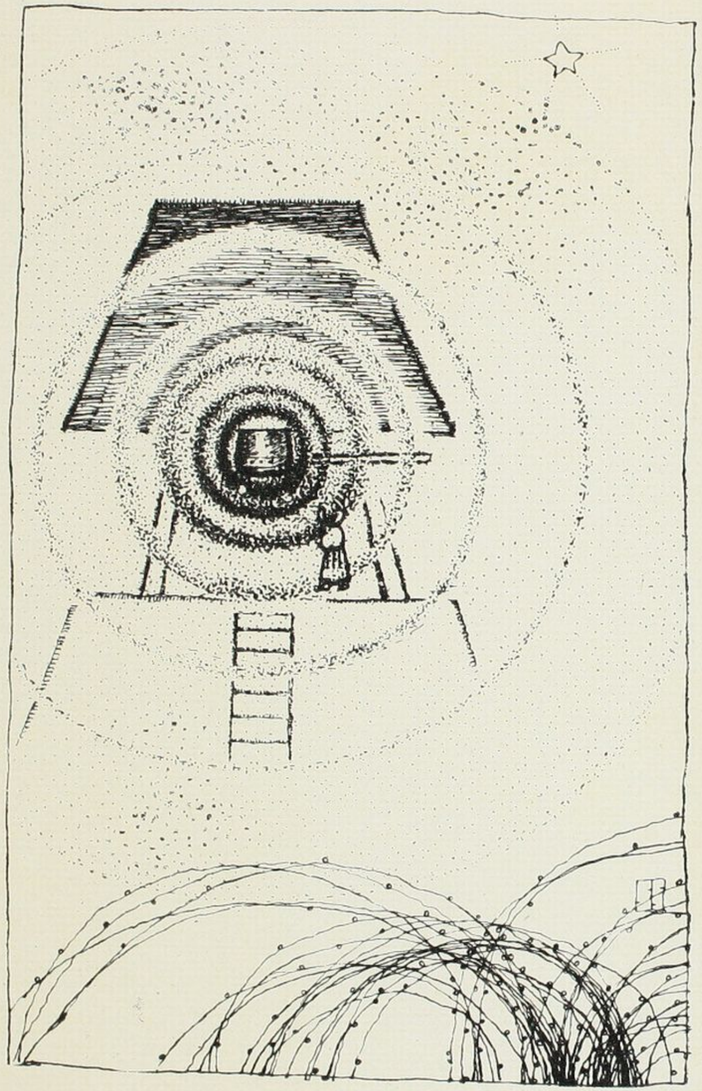
盛られてゐる内容が甚だしく空疎であるやうな氣がする。

私は這般の原因を、我國の詩人たちの小兒に對する研究態度の眞劍さと熱意との不足に歸したい。即ち我國の詩人たちは世の小兒等を觀察するに當り、所謂普通の小兒と云ふ類型的概念にあまり囚はれ過ぎてやしないのだらうか。かれらをあまり小兒視し、單純視し、從つて小馬鹿にしてゐる弊は無いだらうか。

私の所信を持つてすれば、兒童の心は吾等大人と全く同じやうに、否、或時はそれにもまして複雜且眞劍である。「兒童の表情はいつも嚴肅である。」と、ブレツト・ハアトは云つた。またデイ・ラ・メーヤは或處で「小兒の持つ孤寂感ほど絶對な孤寂感は無い」と書いてゐる。

私は現代の我國の童謠を、より優れた、より本質的なものへと導く唯一の方法は、作者たちがその觀照に於て小兒と自分等大人との間に在る桎梏的差別を撤廢することにあると考へる。さうして更に深く、更に複雜に兒童の心象の機微を觀察し、これによつて自分等大人と小兒とが相共々に生きゆくべき輝かしい路を發見し、且つ歌ふことに在ると考へる。

我國の童謠が、悉くかのウイリアム・ブレークの「無心の歌」の如き至純にして天啓的な藝術品の體をとるその日まで、複雜へ！　複雜へ！　は我等の叫びであらねばならない。



伊藤燁子

爪

おいてきぼり

ゆきはよいよい

凧

凧々　あがれ　高くなれ
雲まで　のぼれ
天まで　とどけ
うまいぞ　うまいぞ　凧々　あがれ
まぬけの凧が
ふぬけの凧が
糸目の　切れたも　知らないで
めくら　めつぽに　飛び　あがり
たあかい　杉に　ひつかかり
たあかい　杉の　てつぺんで

風に吹かれて　泣いてゐる
坊ちやん　むかいに　來ておくれ

おいてきぼり

三日月様も出て來たに
だあれも今に見付からぬ
太郎さんの聲も
次郎さんの聲も　聞えない
みんなはどこへ行つたやら
かくれんぼうのその中で
一番後になつた鬼
待てど　暮せど

さがせど　呼べど
みんなはどこへ行つたやら
鳥も　つれだち　歸る夕ぐれ

ゆきはよいよい

ゆきは　よいよい　かへりは　こわい
ここの細道　どこの道
山のふもとの　小さい穴は
花の園生に　ゆく道ぢや
すみれ　たんぽぽ　百合の花
花の色々　咲くところ
そんなら　行かうや

太郎さんも　お出で
次郎さんも　お出で
花ちやんも　私も　みんな行かう

一丁行つたら　日がくれた
二丁行つたら　眞のやみ
三丁行つても　灯が見えぬ
四丁目の先で　きいたらば
狸のおばばのすむとこぢや
大變ぢや　大變ぢや
ゆきはよいよい　かへりはこわい

林信一

きつねの火
お池の金魚
山彦

きつねの火

山のはざまに日がくれる
青いはざまの夕ぐれに
こんこん狐が鳴き出した

遠いお山に黒々と
けふもとつぷり日がくれる
お山の谷の杉の木に
こんこん狐の火が燃える

お池の金魚

お庭の池の青い水
こわごわそつとのぞいたら
白い金魚がをりました

黒いお岩のその下を
白い金魚はいそいそと
いくつも　いくつも
ぬけました

お池の水に繪具皿の

赤い繪具を落しませう
黄ろい繪具を落しませう
金の繪具を落しませう

白い金魚は赤々と
金や　黄色に
染りませう

山　彦

遠いお山に雪が降る
蒼い月夜の山々に
今宵も雪が降りしきる

お庭のまるい柿の木に
もたれて一人ものおもひ

はるかに遠い山々の
かなたにひびく山彦の
かすかに遠きものおもひ

濱田廣介

赤い實
四十雀
いたち

赤い實

春の日永の
山の寺
てらてら庭の
あを木の實
垣の外ゆく
乞食子が
父つあに叱られ
泣きながら
見て見て通つた
あを木の實

つぶつぶ赤い
あを木の實

四十雀

青い帽子に
白いシャツ
何處から來たか
四十雀
チンチンカララ
チンカララ
飴屋にしては
飴がない

パン屋にしては
パン持たぬ
何を賣るのか
四十雀

いえいえ僕は
輕業師
旅から旅を
ひとりぼち
葦の細笛
ふきながら
さかさにくぐる
栗の枝

よこちよに渡る
蔦の蔓
チンチンカララ
チンカララ

いたち

村のはづれの芒川
芒のかげからちよいと出て
鼻黑いたちが小豆とぐ
ササラ　キチキチ

キツチキチ

小笊に一升キツチキチ
手桶に二升キツチキチ
三升といだら手が眞赤

ササラ　キチキチ
キツチキチ

お空に星があるばかり
村はみな寢てしまつたに
まだとぎ止めぬキツチキチ

あしたの朝は霜が降ろ

西川勉

猿の酒
笹舟
夏
船頭の子
猫とかんぶくろ
貝づくし
達磨
夢
電車の窓から
あはれ　無心の小鳥よ

猿の酒

——椋の實　榎の實　けんぽなし
椎の實　あけび　丹波栗
くだけて　とけて　酒になれ！

子猿が　三匹　親猿と
榧の大木の洞窟の
前に坐つて歌つてる

——銀糸のやうな秋の雨
斜の風にあふられて

この洞窟につみ込んだ
木の實　草の實　みな濡らせ！

うねうね川の川上の
林の奥に　親猿と
子猿が　三匹　踊つてる

——何時になつたらできようか？
どうせおいらのものだろに
知らぬが佛の猿の酒！

榧の木蔭でちよいと見た
顔のまくろな炭焼が

瓢箪叩いてわアらふた

笹　舟

大笹　小笹
笹舟うかそ

空は日本晴
舟出にやよろし
さざらぎ川に　笹の葉の
千石船が帆を上げた

舟は行く行く

川下へ

ほほづき積んだ舟が行く

舟は何艘とたづねたら
十三　九つ　十　八つ
ほほづき舟が四十艘
さざらぎ川を下ります

大笹　小笹
笹舟うかそ

夏

風よ
吹け吹け
波が立つ

パラパラ
棗の
實が落ちた

母よ！
水藻に

實があたる

金魚に
怪我は
あるまいか？

船頭の子

荷船は
しづかに
下ります

——向ふ河岸の

金太郎
頭がちよつぴり
短いな！

船から
怒鳴る
船頭の子

頭が
三寸
長かつた

猫と紙ぶくろ

猫の
頭に
紙ぶくろ

すつぽり
被せて
踊らしヨ

炬燵の
上から

すつてんとん！

轉(ころ)げ
落ちると
鈴が鳴る

貝づくし

あさり
はまぐり
帆立貝
蠣(まて)　牡蠣

きさご
くつは貝
螺螺(さざえ)
しほふき
鸚鵡貝

眞珠
法螺貝(ほらがい)
海鏡

達磨

圓まる
着てゐる
緋のころも

だるまは
手もない
足もない

くりくり
眼玉と

髯ばかり

目も
夜も 壁を
睨んでる

だるまに
手を貸せ
足を貸せ

夢

海にぽつかり浮いてゐる

鯨の黒い背の上
銀の揺椅子　緋の褥
小人の群れの輪の踊り

ゆうらりゆらり揺椅子を
揺さぶりながら　黄金の笛
チリロ　リユリロと吹き鳴らす
ほんにわたしは幸せだ！

鯨は走る　潮を吹く
廣い海には波が荒れ
波の兜の大總は
白く見えたり　隱れたり

あら　かあさまに見せたいと
思へば椅子も小人らも
鯨もいつか消え失せて
濱邊にぼんやり立つてゐた

電車の窓から

電車の窓から街を見た
蜜柑　金柑　梨子　林檎
毛布　襟卷　虎の皮！

自働電話のかたはらの
白い煉瓦の交番に

巡査がしよんぼり立つてゐた

隣横丁の惡太郎
靴屋の店の軒下に
竹馬靠せて休んでた

電車が坂を降る時
屋根と屋根との間から
富士の頭をちよいと見た

あはれ　無心の小鳥よ

梨の老樹のかたはらに
兄と弟がよりそひて
ひそかにうたふ唄の句に——

——すずめ　やまがら　ほほじろ
　鶸でも　鳩でも　降りて來い
　庭に小米を撒いといた

兄の掌にかたく握れる
朱の紐の盡くるところに

銀の箸(はし)
ふるひ落しの輪を支へ
ほそく　つめたく　日に煌(きらめ)ける

――かなたの空の黒雲が
霰を降らして來たならば
米と見わけがつくまいに
いつまで呑氣なすずめたち！

忍びかにうたひつつ
二人が眺めやる枇杷の葉蔭に
飛び交ひ囀るみそすずめ！
やがて　お庭の　ふるひの下までも

導いて行く一路の米を
拾ひつつ　たどり行くもの
一羽　二羽　あはれ　無心の小鳥よ！

茅野雅子

ぶうらんこ
しやぼん玉
春風のうた
私のお家

ぶうらんこ

ぶうらんこ　ぶらんこ
ぶうらんこを漕がう
お舟よりも輕く
鳥のやうに高く
ぶうらんこ　ぶらんこ

高くのぼれば塀越しに
遠い山も見える
近い街も見える
見えたと思へば　ゆうらりと

ゆり落される面白さ

青い銀杏も　榛の木も
芥子も　ダリヤも　石竹も
みんな揃つて叩頭(おじぎ)する
ぶうらんこ　ぶらんこ
ぶうらんこを漕がう

遠い山には木が一本
街には小さい馬車二臺
人形のやうな人なかを
犬が三匹(かけ)てゐる
ぶうらんこは面白い

しやぼん玉

管の先からふわふわと
浮いて離れるしやぼん球
大きな　小さな　しやぼん球
ういてゆくのは何處だらう
空はいちめん菫いろ

細い管からふき入れる
私の息でふわふわと
ふくらみあがるしやぼん球
春の光のまん中に

飛行船のやうにとんでゆく
そつと透かせば絹よりも
うすい五色の球のなか
私の息より出て來たか
小さい子供が二三人
天を見上げて笑つてる

春風のうた

春が來そめた夕ぐれに
私は森をとび出して
小さいランプを持ちながら

星の火盞に火を點す
そよ

春が來そめた夕ぐれに
私が森をうごかせば
まるい　まあるい　月が出る
月は私のお友達
そよ　そよ

春が來そめた夕ぐれに
私が森で笛ふけば
甘く　かすかに　やはらかに
子供は床に寢にはいる

そよ　そよ

そこで私は昨夜ぢう
月と二人で考へた
お伽噺に似た夢を
子供の上にまきちらす
そよ　そよ　そよ

私のお家

私が大きくなくなつたらば
石のお家をたてませう
家のまへには白馬が

ひひ　ひん　ひん

うしろの方ではあめ色の
大きな牛が
もう

そして妹が摘んで來た
奇麗な花を瓶にさし
四かくの窓のそばにおく

白い小猫は屋根の上
森の梢になく鳥の
たのしい歌をききながら

お父さま——お母さま
お茶あがる

小川未明

海と太陽
紅い雲
赤い鳥

海と太陽

海は晝眠る　夜も眠る
ごうごう　鼾をかいて眠る

昔　昔　おほ昔
海がはじめて　口開けて

笑つた時に　太陽は
眼をまはして驚いた

可愛い花や　人達を

海が呑んでしまはふと
やさしく光る太陽は
魔術で　海を眠らした

海は晝眠る　夜も眠る
ごうごう　鼾をかいて眠る

紅い雲

ああかい雲　あかい雲
西の空の　あかい雲

おらがをばのおまんは
まだ年　若いに
嫁入りの晩に
海の中へ落ちて
ああかい雲となつた

おーまん　おまん
まだ年　若いに
あかい紅つけて
あかい帶しめて
からこん　からこん
下駄はいて
西のお里へ嫁に行つた

ああかい雲　あかい雲
西の空の　あかい雲

赤い鳥

鳥屋の前に立つたらば
赤い鳥が啼いてゐた
私は姉さんを思ひ出す

電車や汽車の通つてる
町に住んでる姉さんが
ほんとに戀しい　なつかしい

もう夕方か　日がかげる
村の方からガタ馬車が
ラツパを吹いて驅けて來る

鳥屋の前に立つたらば
赤い鳥が啼いてゐた
都の方を眺めると
黑い烟が上つてる

若山牧水

春の雨
ちいさな鶯
雪よ來い來い
はだか
雲雀
たんぽぽ
春の日向

春の雨

木の芽がふくらんだ
窓のさアきの木の芽

木の芽のさアきに
雪がひイとつ生れた

うウまアれた雪
雪がまアるく光つた
光つたと思つたら

きらきらきらりと落つこつた
落つこつたと思つたら
またひイとつ生れた

木の芽　木の芽
木の芽のめぐりに雨が降る

ちいさな鶯

雪のつもつた
枝から枝へ
ちいさな鶯

あをい羽根して
ぴよんぴよん渡る

小枝さらさら
雪はちらちら
ちらちら動いて
羽根(はね)はあをい
あアをい鶯なぜ鳴かぬ

うぐひすよ
うぐひすよ
ちいさな鶯寒(さむ)むいか
寒くばどんどと

火にあたれ

どんどと燃ゆる
圍爐裡のそばで
黙つて聞けば
なアいた　啼いた
ほう　ほけ　べちよ
ほう　ほけ　べちよ

雪よ　來い　來い

雪よ來い來い坊やは寒い
寒いお手々をたたいて待つに

雪よこんこと降つて來い

雪よ來い來い坊やは寒い
さむい天からまん眞白に
ちいろりちろりと降つて來い

雪よ來い來い坊やは寒い
さむいお手々は紅葉のやうだ
雪のうさぎがこさへたい

はだか

裏の田圃で

水いたづらをしてゐたら
蛙が一疋
草のかげからぴよんと出て
はだかだ　はだかだと鳴いた
やい蛙
お前だつてはだかだ

雲雀

雲雀が啼いてるね兄さん
どこで啼いてるのだらう
すゐぶん澤山ゐるね兄さん
お日さまのひかりが

ぴちぴちはぢけてる樣だね兄さん
聞いてゐると
ねむくなるね兄さん
早く走りませう
兄さん　兄さん

たんぽぽ

たんぽぽが咲いた
はたけの畔に
たんぽぽが咲いた
お地藏さんの横に
たんぽぽの花は

まつ黄な花よ
まつ黄な花が
づらりと咲いた
はたけの畔に
お地藏さんの横に
まつ黄に咲いた
たんぽぽやたんぽぽ

春の日向

ちいぴいちいぴい
鳥が啼く

ひいんこつこつ
また別の鳥

遠くか近くか
柿の木か

ちいぴいちいぴい
ひいんこつこつ　ひいんこつこつ

窓を開けたら
太陽が　ばア

加藤まさを

星の糸
お手玉
棚
天の祭壇

星の糸

お星様から
垂れる糸
目にも止らぬ
細い糸

それが睫に
絡まると
坊やは　とろり
ねむくなる

お星様から
垂れる糸
目にも止らぬ
青い糸

どんなお夢を
結ぶやら
坊やは　とろり
ねんねしな

今夜も窓は
星月夜

お手玉

野原で
蟻が
赤い大きな
袋を見つけ

運ぶにや重し
破きはされず
中が見たやと
日を暮らす

野原は
雨の日
露の夜

縫ひ目から
黄色い豆の
芽が延びた

誰の失くした
お手玉か
野原は今ぢや
草ぼうぼう

棚

机の上に
密柑函
またその上に
玩具函

それでも屆かぬ
棚の上
なあにか　ありそな
棚の上

早く大きく
なりたいな
兄さまのよに
なりたいな

天の祭壇

天の祭壇
廣いな

天の燭臺
大きいな

夕べが來れば
姫様が
青い素絹の
着物きて
一つびとつに
點し行く

燈明の數の
多いこと
またその影の
遠いこと
天の燈明

綺麗だな

川路柳虹

小鳩
冬の鳥
枯木と風

小鳩

圓窓　小鳩
春の日ながに顔出して
圓窓　小鳩
お天日(てんと)様も眠さうな
ねんねんころりを歌つてる
圓窓　小鳩

冬と烏

I

からす　からす　からす
烏はどこからきたの？
遠い　遠い國からきだの？
ぼくの生れた村からきたの？
がを　がを　がをと
いつのまにか木の葉が散つて
すつかり裸になつてしまつた
公園の樹の上で啼いてゐる

II

いつでもきく烏のこゑが
今日はなんだか淋しい氣がする！
がを　がを　がをと
お堀の水に夕日がうつり
赤いお宮の鳥居の影が
枯れた芝生に長アく落ちる
がを　がを　がをと
「冬が來たよ」と云ひさうなからす

III

ここは都を見晴す高臺

そして遠い野原の末に
雲か霞とお山が見える
あの山こえた向ふの國が
ぼくの生れた村のある國
お庭の柿がまつ赤に熟れて
冬は烏や百舌鳥が啼いた
たのしい家がおもひ出される

IV

それをおもふとなんだか知らず
ふるさと戀しく涙がにじむ
いまは父さんも母さんもゐない
みんな立派な都にきてゐる

けれどあすこの路はしろく
あすこの森にはけふもさみしく
こんなからすが鳴いてもゐようか？
がを　がを　がをと淋しく

枯木と風

風は木にいふ
——とべ　飛べ　木の葉
ちれ　散れ　木の葉
夏は裸に人がなる
冬は裸に木がなる——と

木は風にいふ
——ふけ　吹け　木枯
ちらせ　木枯
春になつたら芽を出すぞ
おまへの弱くなつたとき

與謝野晶子

大陽の船出
花を摘む
啄木鳥
願ひ
お猿

太陽の船出

お日様　お日様
若いお日様
今日はあなたの鹿島立ち

正月元日　瑠璃色の
海になびいた霞幕
その紫をすと分けて
金のお船に　玉の櫂
東の空に帆を揚げる
めでたや　めでたや

おめでたや

お日様　お日様
若いお日様
今日はあなたの鹿島立ち

金のお船に積み餘る
熱と光は世を温め
眞紅の帆から洩る風は
長閑な春を地に滿たし
そして行手は花盛り
めでたや　めでたや
おめでたや

花を摘む

だれも　だれも
春の日に
花を摘む
むらさきの花
紅い花
庭で摘む
野で摘む
山で摘む
むらさきの花
紅い花

わたしも花を
摘むけれど
淋しいわたしの
摘む花は
うなだれた花
泣いた花
野にも　山にも
見つからぬ
爵金の花や
青い花

春が來たとて

外へ出ず
自分の書いた
繪の中と
自分の作る
歌の中
其處で摘む
獨り摘む
欝金の花や
青い花

啄木鳥

咲いた盛りの
櫻のなかで
啄木鳥こつ　こつ

啄木鳥よ
おまへは自然の
電信技師
何處へ打つのか
櫻のなかで
春のしらせを
こつ　こつと

願ひ

虹のやうな衣物
光る衣物
着いたいな

鳩のやうな白靴
細靴
穿きたいな

天馬のやうな大馬
青い馬

乘りたいな

みんなで着いたいな
みんなで穿きたいな
みんなで乘りたいな
そして　みんなで行きたいな
森の奥の花園へ
みんなで踊りに行きたいな

お猿

お猿が出て來た
負はれて出て來た

お目をぱちくり
赤ん坊のお猿

お猿　手に持つ
小さい紅の扇
負はれた背から
ちよこなんと降りた

降りたお猿は
足もとふらふら
狹い座敷を
斜めに歩るき

舞ふかと思たら
嬢さんの前で
あれ　まあ　赤ン目をする ——
いやなお猿

相馬御風

秋のつばめ
露と蟲
月の兎
來い　來い　螢
若葉

秋のつばめ

うすら冷たい風が吹き
ほそぼそ雨の降る朝は
軒の小さな巣のなかで
親のつばめと子燕が
頸よせ合うてものおもひ

野こえ山こえ海こえて
遠い國から來た親も
ここの小さな巣の中で
生れ育つた子つばめも

秋はさすがにさびしかろ
はじめて遠い國へ行く
わかい燕は初旅の
たのしい夢を見もせうが
旅につかれた親つばめ
お前はいとどかなしかろ

露と蟲

露が散る　露が散る
月の光の照る庭に
きらきらきらと露が散る

さやさやゆれる葉かげでは
露の散るのがうれしいか
コロコロコロコロと蟲が啼く

蟲が啼く　蟲が啼く
月の光の照る庭に
コロコロコロコロと蟲が啼く
さやさやゆれる葉末から
蟲の啼くのがうれしいか
きらきらきらと露が散る

月の兎

月の世界の兎さん
ひとりぼつちの兎さん
おまへの搗く餅　何の餅
お米の餅か草もちか
大福餅か豆もちか
いつもひとりで飽きもせず

月の世界の兎さん
ひとりぼつちの兎さん
おまへの親御はどこにゐる

おまへの仲間はどこにゐる
誰にやるのかぽんぽんと
いつもひとりで餅ついて

來い來い螢

來い　來い　ほたる
大きな螢は高く
小さな螢は低く
林をぬけて
田圃を越えて
わたしの庭へ飛んでおいで

來い　來い　ほたる
子供が呼んだら高く
さびしくなつたら低く
小川に沿うて
草原ぬけて
お池の水をのみに來い

來い　來い　ほたる
わたしはおまへをとらぬ
籠の中へもいれぬ
おほきな螢
ちひさな螢
みんなでなかよく飛んでおいで

若葉

若葉のかげの
うばぐるま
そよそよ風の
吹くたびに
すやすや眠る
赤ちゃんの
林檎のやうな頰ぺたに
チラチラゆれる
日の光
私の膝の

繪雜誌の
繪にも
キラキラ
日の光

内藤鋹策

畑のでんでんまひまひ

畑のでんでんまひまひ

I

裏の畑の桐の木が
りやう手を空へあげました
そらが明けたらお日さまが
烏を木からおひました

II

廣い畑の葱の臺
葱はひらひら光ります

鍬をかついた黒んぼの
鍬もひらひら光ります

III

ひろい畑のまんなかに
鍬をひと鍬あてました

IV

鍬があたれば桐の木は
手に手うちうちはやします
桐のまはりの葱畑は
渦をまきまきめぐります

v

だんだん大きくめぐります
ぐるぐるめぐつて遊びます

井上康文

七つの小山
赤いリボンと黒い帽子
めんない千鳥

七つの小山

一つ小山を越えてゆく
お利口もののボールさん

二つ小山はいちめんに
綠の草が生えてゐた

三つ小山を越えたらば
赤い花が咲いてゐた

四つ小山の木の枝に

小鳥が歌をうたうてた

五つ六つの小山には
白い羊が遊んでた

そこでかはいい小羊つれて
七つの小山を越えました

小山越えたら父さんに
頭を撫でて貰つた

赤いリボンと黒い帽子

ギイツコン　バツタンコ
赤いリボンが
ああがつた
黒い帽子が
さあがつた

ギイツコン　バツタンコ
黒い帽子が
ああがつた
赤いリボンが

さあがつた

ギイツコン　バツタンコ
お山も　お家も
お陽様も
ああがつた
さあがつた

めんない千鳥

ちいどり　千鳥
めんない千鳥
なに泣いておぢやる

赤い花が見えぬとか
かあいい雛が見えぬとか
それでそんなにお泣きやるか

ちいどり　千鳥
めんない千鳥
ここまでおぢやれ
赤い花を投げてやろ
かあいい雛もおんぶしや
それで泣かずに遊びましよ

ちいどり　千鳥
めんない千鳥

お前にや畫がないであろ
濁つた水も見えぬだろ
おまへはいちばん　しあはせ者よ
いつも氣ままなめんない千鳥

野口雨情

蜀黍畑
十五夜お月さん
お脊戸の藪
烏の小母さん
燕
山椒の木
四丁目の犬
鵙と雀
鵙の嫁入り
歸る雁

蜀黍畑

お背戸の
親なし
撥ね釣瓶

海山
千里に
風が吹く

蜀黍
畑も

日が暮れた

雞
さがしに
行かないか

十五夜お月さん

十五夜　お月さん
御機嫌さん
婆やは　お暇
とりました

十五夜　お月さん
妹は
田舎へ貰(もら)れて
ゆきました

十五夜　お月さん
母(かか)さんに
も一度　わたしは
逢ひないな

お脊戸の藪（子守唄）

お脊戸の　お脊戸の

赤蜻蛉(とんぼ)
狐のお嘶
聞かせませう

糸機七年
織りました
信田(しだ)の狐は
親狐

信田のお藪の
ふるさとで
子供にこがれた
親狐

お春戸の　お春戸の
赤蜻蛉
明日もお藪に
來てとまれ

烏の小母さん

烏の小母さん機織つてた
チンバタ　チンバタ
機織つてた
木綿の腹掛機織つてた

泣く兒に腹掛
買つてやれ
烏の小母さん機織つてた
チンバタ　チンバタ
機織つてた
更紗の綿入機織つてた
泣く兒に綿入
買つてやれ

燕

燕の
母さん
酒落母さん

揃ひの
簪
買つてやろ

牛乳屋の
表に

遊んでた
母さん
燕は
酒落母さん

山椒の木

田甫の　田甫の
山椒の木

上總は鰯の
大漁だ

おいらが父さん
いつかへる

聞かせてくれぬか
山椒の木

四丁目の犬

一丁目の子供
駈け　駈け
歸れ

二丁目の子供

泣き　泣き
逃げた

四丁目の犬は
足長
犬だ

三丁目の角に
此方向いて
居たぞ

鼬と雀

ここの家は
引つ越して
雨戸が
締つて居りました

お庭の　お庭の
眞中に
鼬が歩いて居りました

ここの家は

引つ越して
雨戸が
締つて居りました

お庭の　お庭の
木の上に
雀が遊んで居りました

鼬の嫁入り

今夜は鼬の嫁入りだ
鼬に長持
貸してやれ

厩の裏の篠藪に
鼬が提灯
點けてゐた

厩の裏の篠藪は
霜枯れ篠藪
おー寒い

今夜は鼬の嫁入りだ
鼬に駒下駄
貸してやれ

歸る雁

雁が歸る
雁が歸る
雁が
歸る

襷に並んで
雁が
歸る

山が暴れた

海が暴れた
風で暴れた

帶になつて
紐になつて
雁が
歸る

大關五郎

謎
丘の上
水車

謎

お六婆さん謎かけて
といてごらんと知らぬ顔
煙草をゆつくり吸ひながら
わかつたかねと知らぬ顔
謎のとけないそのうちに
婆さん眠つて知らぬ顔

丘の上

花いろいろの丘の上
父さま戀しと
眺むれば
赤い夕日が泣きました
母さま戀しと
花つめば
しづかに牛が鳴きました
花いろいろに

日が暮れて
婆やが私を呼びました

水車

赤い椿が散りかかる
朝から晩まで
水車

お山の雪がとけました
水にうたれて
水車

がたんごとんと水車
聽けば樂しい水車

柳澤健

碧眼の人形
冬
夕暮
海のあなた
春の風

碧眼の人形

生れ故郷を後に見て
黄金色の帆の舟に乘り
はるばる遠い海の旅

漸くここに來て見れば
疊の床に紙の窓
みんな見馴れぬものばかり

夜ともなれば人形は
淋しい部屋にひとりぼち

故郷を思ふて涙ぐむ

冬

寒い寒い冬が來た
誰と來た
お山の寺の小僧と來た　小僧と來た
小僧はお堂で朝つから
大聲あげてお經讀み
和尚樣にかくれて懷手
それがこつそり見つかつて
お經の眞中に叱られた　叱られた
お經が濟んだら豆腐買ひ

雪靴穿いてとぼとぼと
峠を越えて買ひに來た　買ひに來た
豆腐は買つたが歸るさに
眞白な犬に吠えられて
買ふた豆腐を落(おつ)ことした　落(つ)つことした
寒い寒(さむ)い寒(さむ)い冬が來た
お山のお寺の小僧と來た
豆腐を落した小僧と來た　小僧と來た

夕暮

お宮の屋根には親の鳩
落葉の上には子の子鳩

ほろほろほろりほろほろり
啼いてるうちに日が暮れた

峠三里の上り下り
やつこらやつと來は來たが
めざした街の灯(ともしび)が
見えないうちに日が暮れた

徑は小暗し燈(あかり)は持たず
落葉かさかさ悲しく寒く
嘆息つけばほろほろり
鳩の啼く音に月が出た

海のあなた

初めて登つた塔の上
高い高い塔の上

塔の上から眺むれば
丘越え野越えて青い海

青い海には黄金の船
薔薇色の船　銀の船

船の行手はどこであろ

海のあなたは何であろ

脊伸びすれどもはてもない
青い青い海ばかり

船の行手はどこであろ
海のあなたは何であろ

春の風

春の風が
窓掛にそよそよ
黄卵色の窓掛にそよそよ

お部屋の隅にあるピアノにそよそよ
ピアノの上のお人形さんにそよそよ
お人形さんの黄金色の髪にそよそよ

春の風が
卓子にそよそよ
花色の卓子にそよそよ
卓子のうへの御本にそよそよ
御本を見てゐる春ちやんにそよそよ
春ちやんの眞黑な髪にそよそよ

山村暮鳥

田圃にて
昔がたり
鰹釣り
鳥刺し
毬うた
はねつるべ
海邊にて

田圃にて

たあんき　ぽーんき
　たんころりん
たにしをつつつく鴉どん
はるのひながのたんぼなか

たあんき　ぽーんき
　たんころりん
わあれもひとも生きもんだ
あんまりひどくしなさんな

たあんき　ぽーんき
　たんころりん
鴉はきいても知らぬ顔
はるのひながのたんぼなか

昔がたり

むかし　むかしの
　そのむかし
むかしの話を　きかさうか
ぢぢが　こどもの
　その頃も
山には霧が　かかつてた

森には小鳥が啼いてゐた

鰹釣り

父よ
おいらも
行きてえな
大きな海の
まんなかで
おいらも鰹が
釣つてみてえな
おいらも船に
のりてえな

まつてろ
まつてろ
その腕が
樫の木のやうに
なるまで

鳥刺し

とりさしさん
とりさしさん
たばこいつぷく
すつてゆきな
小鳥がその間に逃げるだろ

にげたら
　にげたで
　ほつておきな
鳥刺しや
　こまつたかほしてた

毬うた

小雨はちらちら
傘さしておいで
傘はない　ない
もう日がくれる

傘がなければ
蓑着ておいで
蓑もない　ない
どこまでゆきやる

遠い町までおくすり買ひに
狐こんこん
ちよつと一走り

あとで梟が
ほうほとなくよ
梟なぜ鳴く
晝寢のゆめに

金貨拾つて足辺べらして
つるり枝から地べたへ落ちて
一眼つぶして
痛くてならぬ

狐こんこん
鐵砲打ちに見つかるな

はねつるべ

おらが脊戸の
はねつるべ
水汲むたんびに

ぎいーこ　ばたり
それをみつけて
小鴉三羽

なかよくとまつて
うごかしたけれど
うごかない
おばさん
お早やう
かあ　かあ　かあ

海邊にて

浪よ
浪(なみ)　浪
ここまでおいで
浪よ
浪　浪
つかまへておくれ
どんどと打つてくりや
そらにげた
浪よ

浪　浪
ここまでおいで
腹がたつたか
浪よ
浪
さつとひくとき
砂の小山をけちらした

前田春聲

王子の旅

王子の旅

カツ　カツ　カツ　カツ
馬のあゆみをいそがせて
峠を上るこの王子

身體にまとふこの鎧
黄金に光つて美しく
翼のやうに波を打つ

王子の馬はいそいそと
カツ　カツ　のぼる坂の上

嬉しい叫びをあげてゆく

王子の馬よ　とく進め
悪い后はもう見えず
追手の人も　もうゐない

王子の馬よ　とく進め
日はもう落ちて彼方には
夕日が金に輝いた

明日はひろ野のまんなかを
妹探して鳥のやう
見知らぬ國へ急がせやう

王子の馬よ　とく進め
旅の疲れもなんのその
妹探しに旅をゆく

峠も丘もうちこえて
彼方へ彼方へ急ぎゆく
王子の姿はなつかしい

馬は歩みをいそがせて
夕日の國へ　カツ　カツ　と
いそいそのぼるいさましさ

松山二郎

動物園テニス
動物園觀兵式

動物園テニス

ゼロワン　ゼロツウ
ゼロスリー
カバクン　シツカリ
タノミマス
モウ　一テンデ
マケニナル

クマクン　サイクン
ユダンシテ
ザウクン　タチニ
マケヌヤウ

カツテ　カブトノ
ヲヲシメヨ

カツモ　マケルモ
ウンシダイ
ポンポン　ポント
ラケツトノ
ヲレル　クライに
ヤリタマへ

動物園觀兵式

トテト　テトテ
トテト　テトテ
レンタイチヤウ　ノ
ザウクン　ガ
ヘイタイ　ツレテ
ドコヘ　ユク

レンペイデヤウ　ニ
アツマツテ
カンペイシキ　ヲ
スルノデス

トテト　テトテ
トテト　テトテ
ヘイシニ　ナリタイ
モノハ　ミナ
アトヘ　ゾロ　ゾロ
ツイテ　コイ
トテト　テトテ
トテト　テトテ

福田正夫

小鳥
星の歌

小鳥

I

ぴいちく
ぴいちく

谷のこなたに
山のかなたに
小鳥はうたふ
小鳥かあいや

親なし小鳥
なにをたづねて
啼いてるの

II

ぴいちく
ぴいちく

小鳥可愛や
麥畑
空へ上れば地も見えぬ

小鳥　小雲雀
雪の日に
親をたづねてとぶまいぞ

星の歌

流れる川に行くや星
波うつ沖に消ゆる星
ゆふべになれば父戀し
あしたに光る　金の星

尋ねさがせど父もなし
尋ねさがせど物もなし

ゆふべも　朝も　山の端に
ふるへて落ちる　金の星

藤森秀夫

山の娶御
栞
月が一人
父さんどうど
峯の春
めえめえ兒山羊
鷺殿

山の娶御

向う山に
啼く鳥は
ちゆうちゆ鳥か
三井鳥か
源三郎の
土産に
何を何を
貰ふた
金差銀差
貰ふた

糸魚川街道の眞中で
もろこし畑が
　　ぶるぶる

雪の蠶
手綱に取つて
山の娶御の
里歸り

栗

松の細根で水くれて
星の葛籠おころりよ
手のなる紅葉

お握り上手
ねんねんころりよ
こんころり

山の赤ちやん育てたは
胸毛の赤い駒鳥さん
黄色い辛夷(こぶし)の
葉をしいて
ねんねんころりよ
こんころり

月が一人

月が一人
空をうろうろ
泣く兒が欲しや
蔭取らう

野原を一人
泣く兒がうろうろ
蔭を捜せど
草ばかり

露に濡れつつ
空見れば
青きが中に
月ばかり

父さんどうど

子「父さんどうど
どうどの父さん
とつととかけれ
とつととつと走れ」
父「父さんお馬は
走らぬお馬」

兄「お馬賣ろとて
市場へ行けば」
姉「市場賣るとこ
賣るとか市場」
妹「ばんぱ　ばん屋で
ばん屋の　ばんぱ」
母「茨野の道
野に咲く茨
赤い實も散れ
雪も散れ」

峰の春

嶽の峯の
古沼にや
千年たつても
草生えぬ

萬年たつても
魚住まぬ

千年萬年
まつたとて

何の雪と
雲ばかり

めえめえ兒山羊

めえめえ
森の兒山羊
兒山羊走れば
小石にあたる
あたりやあんよが　あ痛い
そこで兒山羊はめえと鳴く

めえめえ

森の兒山羊
兒山羊走れば
株にあたる
あたりやあんよが　あ痛い
そこで兒山羊はめえと鳴く

藪にあたれば
腹こがちくり
朽木あたれば
頸こが折れる
折れりや兒山羊は
めえと鳴く

鷺殿

霧田の畔の鷺殿は
どうして頸が長いのか
だるでだるで長く候
蓑も笠も銀作り
暇にまかせて田を作れ
泥つくで御免
柳のたわしで洗はつせ
冷いで御免
炬燵の中へあたらつせ
熱いで御免

熱けりや
ひつさがれ
尻が痛いで　いやいや
尻が痛くば　綿布け
塵つくで　いやいや
いやなら　おきやがれ
起上（おきあがり）　三文
廉い時や二文

西條八十

かなりや
鉛筆の心
夕顔
お菓子の家
山の母
玩具の舟
木のぼり太右衛門
蟻
お山の大將
鈴の音

かなりや

唄を忘れた金絲雀は　後の山に棄てましよか
いえ　いえ　それはなりませぬ

唄を忘れた金絲雀は　背戸の小藪に埋けましよか
いえ　いえ　それもなりませぬ

唄を忘れた金絲雀は　柳の鞭でぶちましよか
いえ　いえ　それはかはいさう

唄を忘れた金絲雀は

象牙の船に　銀の櫂
月夜の海に浮べれば
忘れた唄をおもひだす

鉛筆の心

鉛筆の心
ほそくなれ
削つて削つて
細くなれ

三日月さまより
なほ細く

蘆の穂よりも
なほ細く
燕の脚より
なほ細く
ズボンの縞より
なほ細く

朝の雨より
まだ細く
豌豆の蔓より
まだ細く
蠅蜥の髭より
まだ細く

香爐の煙と
消えるまで

鉛筆の心
ほそくなれ
削つて削つて
細くなれ

夕顔

去年遊んだ砂山で
去年遊んだ子をおもふ

わかれる僕は船の上
送るその子は山の上

船の姿が消えるまで
白い帽子を振つてたが

けふ砂山に來て見れば
さびしい波の音ばかり

あれほど固い約束を
忘れたものか　死んだのか

ふと見わたせば磯かげに

白い帽子が呼ぶやうな

駈けて下りれば　夕顔の
花がしよんぼり咲いてゐた

お菓子の家

山のおくの谿あひに
きれいなお菓子の家がある

門の柱は飴ん棒
屋根の瓦はチョコレイト
左右の壁は麥落雁

踏む舗石がビスケツト

あつく黄ろい鎧戸も
おせば零れるカステイラ
靜かに午をしらせるは
金米糖の角時計

誰の家やら知らねども
月の夜更におとづれて
門の扉におぼろけな
二行の文字を讀みゆけば

「ここにとまつてよいものは

ふたおやのないこどもだけ」

山の母

いつも見る夢
さびしい夢
月の夜ふけの
山の上

青いひかりに
ぬれながら
うちの母さま
ただひとり

草も生えない
岩山の
白い素足が
いとしうて

泣いてまねけど
もの云はず
風に搖れるは
影ばかり

いつもさめては
さびしい夢

月の夜ふけの
山の上

玩具の舟

雪のふる夜に
母さんの
膝にもたれて
おもふこと——

あかい帆かけた
玩具の舟は
夏の川原に

忘れた舟は
どこへ流れて
行つたやら

木のぼり太右衛門

いつちく　たつちく　太右衛門が
いつちく　たつちく　無花果の
枝にのぼれば日が暮れる

いつちく太右衛門　お侍
お寺の縁で午睡して
鴉に大小さらはれて

山から　鍬から　田圃から
たづねあぐんだ大髻
元結もきれて思案顔

いつちく　いそいだ　太右衛門が
いつちく　いちいち　無花果の
枝をゆすれば　月が出る

蟻

蟻　蟻
寂しかろ

はこべの葉つぱに
ついて來た
道鑵山の
黑蟻を
神田の通りで
放したが

蟻　蟻
寂しかろ
路がわからず
さびしかろ

お山の大將

お山の大將
俺ひとり
あとから來るもの
つき落せ

ころげて　落ちて
またのぼる
あかい夕日の
丘の上

子供四人が
青草に
遊びつかれて
散りゆけば

お山の大將
月ひとつ
あとから來るもの
夜ばかり

鈴の音

王樣の馬の

頸の鈴
ちんからかんと
鳴りわたる
日はあたたかに
風もなく
七つの峠が
晴れわたる

山のふもとの
七村に
青亞麻の
花咲けど
ひとにわかれた

若者は
今日も今日とて
欲獻く

王様の馬は
黄金の馬
御供の馬は
泥の馬
ほがらほがらの
鈴の音の
雲にひびくを
なんと聽く

山をめぐれど
戀人は
青亞麻の
花がくれ
夢と消ぬべき
銀の鈴
おぼろおぼろに
きくときも

日はあたたかき
七村に
わかれしひとを
忘れねば

晴れて悲しき
胸の鈴
ちんからかんと
鳴りわたる

齋藤正雄

昔のお嘶
毛糸の靴
陸の船長
爺さん鍛冶屋
侏儒の舟

昔のお噺

手鞠のやうによくじやれる
白い小猫が納屋にゐた
手品のやうによく消える
小さい鼠が納屋にゐた
　それは昔の噺です

葡萄のやうなふたつの眼
眞珠のやうに綺麗な齒
小猫の足は綿のやう
それで鼠をつかまへた

　それは昔の噺です

鼠が悲しく泣いたので
小猫は坐つて見てゐたら
ずるい鼠は逃げ出した
　五つの時の正月の
　それは昔の噺です

毛糸の靴

日の温かな
晝の庭
赤い毛糸の

ちぴ靴が
椿の枝に
ほしてある

啼きくたびれた
うぐひすが
巣とまちがへて
晝寢した
赤い小さな
毛糸靴

陸の船長

僕は病氣で
寢たけれど
ふたつの船は
帆を上げて
布團の波に
浮いてゐる

廣い疊は
青い海
僕は寢臺の

甲板から
まい夜船路の
夢を見る

爺さん鍛冶屋

村の鍛冶屋の
お爺さんは
朝は早ようから
トツチン　カツチン　トツチンカン
春がゆくとて
鞴のうへに

花が散つても
トツチン　カツチン　トツチンカン
よくよく聞いたら
唖でつんぼ
いつも默つて
トツチン　カツチン　トツチンカン

侏儒の舟

花散る里の
まつ晝間
花の小舟に

櫂つけて
侏儒が舟を
漕いでゐた

小鳥も啼かず
人もゐぬ
春の小川の
蘆蔭で
侏儒の舟の
音がする

北原白秋

お祭
のろまのお醫者
雨
りすりす小栗鼠
舌切雀
物臭太郎
隣同士
白い木のかげに
雪のふる晩
赤い鳥小鳥

お祭

わつしよい　わつしよい
わつしよい　わつしよい
祭だ　祭だ
背中に花笠
胸には腹掛
向う鉢巻　そろいの半被で
わつしよい　わつしよい
わつしよい　わつしよい
わつしよい　わつしよい

神輿だ　神輿だ
神輿のお練だ
山椒は粒でも　ピリツト辛いぞ
これでも勇みの山王の氏子だ
わつしよい　わつしよい

わつしよい　わつしよい
わつしよい　わつしよい
眞赤だ　眞赤だ　夕焼小焼だ
しつかり擔いた
明日も天氣だ
そら　揉め　揉め　揉め
わつしよい　わつしよい

わつしよい　わつしよい
わつしよい　わつしよい
俺らの神輿だ　死んでも離すな
泣蟲やすつ飛べ　差上けて廻した
揉め　揉め　揉め　揉め
わつしよい　わつしよい

わつしよい　わつしよい
わつしよい　わつしよい
廻すぞ　廻すぞ
金魚屋も逃げろ　鬼灯屋も逃けろ
ぶつかつたつて知らぬぞ

そら退け　退け　退け
わつしよい　わつしよい

わつしよい　わつしよい
わつしよい　わつしよい
子供の祭だ　祭だ　祭だ
提灯點けろ
御神燈献げろ
十五夜お月様まんまるだ
わつしよい　わつしよい

わつしよい　わつしよい
わつしよい　わつしよい

わつしよい　わつしよい
あの聲何處だ
あの笛何だ
あつちも祭だ　こつちも祭だ
そら揉め　揉め　揉め
わつしよい　わつしよい

わつしよい　わつしよい
わつしよい　わつしよい
祭だ　祭だ
山王の祭だ　子供の祭だ
お月様紅いぞ　御神燈も紅いぞ
そら揉め　揉め　揉め

わつしよい　わつしよい
わつしよい　わつしよい
わつしよい　わつしよい

のろまのお醫者

蚊の聲ぶんぶん
ごろすけほう
今夜はお盆の十六日
お閻魔様の盆踊
蛙の音頭で始めよか
蛙の小母さん物云へぬ

咽喉が腫れたか　腹痛か
腹が痛けりや醫者呼んで來う
醫者は何醫者　かへろ醫者

蚊の聲ぶんぶん
ぱあくぱく
空には紅いお月樣
小藪ぢやわんぐり蟾蜍
今夜のお菜は旨ござる
ところへ兎が飛んで來て
もしもし　賴みぢや　早よお出で
よしよし待たしやれ　今直ぐぢや
お腹が減つてはどもならぬ

蚊の聲ぶんぶん
雨しよぼしよ
いそいで御座れよ間にあはぬ
それではまゐろと　のつそのそ
兩手に洋杖　折鞄
山高帽子でやつて來たが
踊も濟んだか聲もなし
こいつはしまつた面目ない
田圃はまつくら　暗闇

蚊の聲ぶんぶん
ごろすけほう

ごろすけぼうこう　むだぼうこう
お山ぢや梟が嗤ひ出す
雨はざあざと降つて來る
おやおやおやおや　こりやどうぢや
目ばかりぱちくり　のろま醫者
のろくさ　困つて逃げこんだ
お閻魔様の　そりや　縁の下　縁の下

雨

雨がふります　雨がふる
遊びにゆきたし　傘はなし
紅緒の木履も緒が切れた

雨がふります　雨がふる
いやでもお家で遊びませう
千代紙折りませう　たたみませう

雨がふります　雨がふる
けんけん小雉子が今啼いた
小雉子も寒かろ　寂しかろ

雨がふります　雨がふる
お人形寢かせどまだ止まぬ
お線香花火もみな焚いた

雨がふります　雨がふる
晝もふるふる　夜もふる
雨がふります　雨がふる

りすりす小栗鼠

栗鼠　栗鼠　小栗鼠
ちよろちよろ小栗鼠
葡萄の房が熟れたぞ
啼け　啼け　小栗鼠

栗鼠　栗鼠　小栗鼠
ちよろちよろ小栗鼠

あつちの尻尾が太いぞ
揺れ　揺れ　小栗鼠

栗鼠　栗鼠　小栗鼠
ちよろちよろ小栗鼠
ひとりで飛んだらあぶないぞ
負されぬ　負されぬ　小栗鼠

舌切雀

舌切雀はどこへ行た
どこへ行た
どれどれ探しに出かけませう

雀のお宿はあれかいな
あれかいな
チョツボリ小藪が山の蔭

とんとんからりこ　とんからり
とんからり
中ではとんから梭の音

お宿はここかとたづねたら
たづねたら
おおおお　お爺さん　ようお出で

百切雀のお土産は
お土産は
葛籠にいつぱい綾錦

雀のお宿はどこかいな
どこかいな
爺さん私も行て見よか

慾ばり婆のお葛籠は
お葛籠は
開けたらびつくりおオ化(ばけ)

物臭太郎

物臭太郎は朝寝坊
お鐘が鳴つても目がさめぬ
鶏(こけこ)が啼いてもまだ知らぬ

物臭太郎は家持たず
お馬が通れと道の端
お地頭見えても道の端

物臭太郎はなまけもの
お腹が空いても臥てばかり

藪蚊が蟄しても臥てばかり

物臭太郎は慾しらず
お空の向うを見てばかり
櫻の花を見てばかり

隣同士

ぽつぽのお家は四角なお家
四角なお家の圓(まる)るいお窓
圓るい窓から頭を一寸と出して——

隣のぽつぽも四角なお家

四角なお家の圓るいお窓
圓るい窓から一寸と出して——

白い木のかげに

白い木のかげに
お婆さんがござる
白い月ながめて
こつくりこつくり眠つて
いつもいつもござる
啄木鳥　啄木鳥突つ啄きな
一寸行つて突つ啄きな

ぽつぽう　お早う
ぽつぽう　お早う
おお　ぽつぽう　よう

雪のふる晩

大雪　小雪
雪のふる晩に
誰か　ひとり
白い靴はいて
白い帽子かぶつて

大雪　小雪
雪のふる街を
誰か　ひとり
あつち行つちや「今晩は」
こつち行つちや「今晩は」

大雪　小雪
雪のふる中を
誰か　ひとり
「泣く子を貰はう」
「寢ない子を貰はう」

大雪　小雪

雪のふる窓に
誰か　ひとり
「生膽貰はう」
「その子を貰はう」

赤い鳥小鳥

赤い鳥　小鳥
なぜなぜ赤い
赤い實をたべた

白い鳥　小鳥
なぜなぜ白い

白い實をたべた

青い鳥　小鳥
なぜなぜ青い
青い實をたべた

水谷勝

きりぎりす
葱坊主
とんころりん

きりぎりす

夜ごとに深む
秋ゆえに
霧は佗しく
ながれゆき
星は淋しく
またたくが
かこつな啼くな
きりぎりす
ふるえてやまぬ

くろがねの
ひびきは胸の
殿堂の
扉をくだく
愁はしさ
かこつな啼くな
きりぎりす

葱坊主

てのひらに
白い坊主をのせて
思に悲しむ

夕まぐれ

淋しい小坊主
啞の坊さん
白い小坊主
くりくり坊さん

眼はいたし
涙はあつし
白い小坊主
葱の小坊主

とんころりん

とん　とん　ころりん
とん　ころりん
夕ぐれ時のあの音は
君の小琴か風鈴か

とん　とん　ころりん
とん　ころりん
夕ぐれ時のあの音に
醉うて浮んだ夏の月

三木露風

秣の桶
駱駝と人
鷹の目
黄金の泉
雨の音
青い湖水
追風
道草
かつこう
牧神の笛

秣の桶

キリストが
秣の桶で生れた日
ながはな　たばこが咲いてゐた

目を開いたキリストが
一に見たのは　るりのそら
二に見たのは　ながはな　たばこ

開け放した扉があいて
きしきし　鳴つてる

鳥がなく
家畜(けもの)が　めいとなく

秣の桶で
赤ん坊のキリストが
手をあけて　握つたながはな　たばこ
数へて見たら　数が十

駱駝と人

あかるい　あかるい眞つ晝間
白(しろ)い　白(しろ)い眞つ晝間
旅の行商隊(カラバン)　どこへゆく

行商隊(カラバン)　行商隊(カラバン)
どこへゆく

鈴が鳴る
からん　からんと鈴が鳴る
駱駝の荷物に何積んだ
知らぬおくにの王女へと
寶石の數　黃金の數

駱駝のあゆみは　ゆらりゆら
人も　らくだも　物言はず
沙の色とも見えさうな
煙の色にもなりさうな

旅の行商隊(ガラバン)　どこへゆく

立寄る椰子の蔭もない
のみたい水も見つからぬ
行商隊(カラバン)　行商隊(カラバン)
どこへゆく
知らぬ王女の住む國に

鷹の目

鷹(たか)の目　鷹(たか)の目
鷹(たか)の目は何を見た
青天井の空を見て

横目でにらんだ富士の山

下界の方を見わたすと
雀がちよつぽり飛んでゐる
十羽　二十羽　三十羽
あたまを下げてとんでゐる

鷹は雀に目もくれず
ひとりさみしい羽づくろい
富士の山はいつか消え
青天井はかぎりなし

鷹の目　鷹の目

鷹の目に何がある
萬の物が消えたとき
眞赤な牡丹の花がある

黄金の泉

ぶくぶく泉
なぜ鳴る泉
日が出て來うが　日が沈まうが
からすのやうな夜が來よが
泉のやんだことがない

まはれ　まはれ　黄金の魔

泉のふちを飛びまはれ
小ちやい小ちやい黄金の魔
一寸法師の黄金の魔
泉の中には國がある
人の知らないみやがある
月の光で髪を梳く
雲母のやうな姫がゐて

きいたかきいたかその唄を
「日輪空にかかるとき
わたしや金の梭を投げ
月輪水に沈むとき
靈きせぬ絲を捲きまする」

まはれ　まはれ　黄金の魔
姫のまはりを飛びまはれ
ぶくぶく泉
鳴る泉
姫の胸から出る泉

雨の音

そつと　そつと
雨よ降れ
坊やの眠りを
覺さすな

そつと　そつと
忍んで降れ

森の向うに
灯が消えた
さびしうなつた
暗うなつた
何が　そこから
來るぢややら

シツト　シツト　シツト
何が　そこから
來るぢややら

坊や
坊や
おやすみ
おやすみ

青い湖水

落葉林を出て來たら
湖水の水が光つてた
青い青い水の色
お舟は一つも浮んでない
お舟は一つもないけれど

青い青い水のいろ
ジョンの眼の色　土耳古色
水姫が梳く髪のいろ

お供のジョンは水浴びに
じやつぷ　じやぷと泳いでる
ああ眞つ青な秋の空
じやつぷ　じやつぷと水の音

ジョンよ來い　ジョンよ來い
林の中から見てゐやう
いつまでも　いつまでも
あの眞つ青の水の上を

追風

よいやさ　よいやさ　よいやさ
艫綱解いて
出せ　出せ　船を
捲け　捲け　白帆
よいやさ　よいやさ　よいやさ

船頭　鉢巻　出て見れば
紀州熊野の權現樣の
注縄をゆらに吹く風よ
ふけや西風　ふけふけ追風

ふけや西風　ふけふけ追風
鳥羽の港や伊良子崎
廻つて走る遠州灘
荒い潮路に雪がふる

ふけや西風　ふけふけ追風
丸に十字の蜜柑船
あすは江戸へはいるだろ
ふけや西風　ふけふけ追風

道草

ホウ　ホウ　ケキヨ
ケキヨ　ケキヨ　ケキヨ
ホウ　ホケキヨ
山の鶯
日が蔭る

山越えゆけば
何となう
悲みせまる
ここちして

われも谿間の
草を敷き
口笛吹いて
物眞似る

ホウ　ホウ　ケキヨ
ケキヨ　ケキヨ　ケキヨ
ホウ　ホケキヨ
綠の靄に
日が落ちる

かつこう

かつこう　かつこう　かつかう
どこで　なくのか　わからない
しづかな　しづかな　そのころよ
あかるい　夏の　まつぴるま

かつこう　かつこう　かつこう
山の林の　山祇が
ひとり　うかれて　あそぶのか
鵲蕨を　ならす　山の晝

かつこう　かつこう　かつこう
青い　木の葉の　きものきて
かたく　にぎつた　樫の杖
谷の　ながれが　めぐります

かつこう　かつこう　かつこう
樺の　林の　そのこゑが
八つの　峰に　ひびくとき
七つの　瀬でも　こたへます

牧神の笛

けんけん　ほろほろ

けん　ほろり
小山の小雉子が
鳴くときに

羊の神の
牧神は出て
やさしい笛を
吹きならす

日がな一にち
吹きならす
「泉の姫は
なぜ見えぬ」

牧神は悲しうて
さびしうて
ふきならす
音の色に

けんけん小雉子
雉子が來る

白鳥省吾

秋の日
鰐の子の新年
最初の光
黑い雀　白い雀
雲雀の巢
飛行機
小犬のライちやん

秋の日

馴れた山雀　籠の中
籠の中にて三年越
ぴーぴーぴーと啼いてゐる
戸口あけても出てゆかず
ぴーぴーぴーと宙がへり
小さい世界の樂しさう

俊一さんの自慢の小鳥
戸口をあけた籠の中
今日もけふとて啼いてゐる

ぴーぴーと宙がへり
その宙がへるはづみでか
あけた戸口を出て行つた

山雀とほく飛んでゆく
俊一さんは驚いて
空ながめつつ追ひかけた
あまりに青く空晴れて
山雀の胸躍らせた
秋のてる日が憎らしい

鰐の子の新年

都に春は來たが
動物園の鰐の子は悲しい
美しき裝ひせる少年少女
立ちどまり餌をなげやれど
鰐の子は喰べんともせず
隣の北極熊は雪の寒さを喜び
笑ふごとく吼ゆれど
錆いろの鰐の子の春は悲しい

鰐の子は熱沙のほとり
椰子の花スフキンクス見え

獅子吼ゆる河岸(かがん)に行きたいのだ
櫻と大佛と上野の鐘と
夜は華やかの活動の囃子と
赤と青にかはる仁丹の灯との
都の春の鰐の子は悲しい

最初の光

若葉のころ
新しく町に出來た水力電氣の
技師長の友を訪ねた
瀧のほとりに燕が飛んでた

友は汗にまみれて
電氣を起す機械の
電動機の試運轉をして居た
長い間　私を見向きもせず働いた

そして町に一齊に灯がついた
ランプの代りに眩しい電燈が
幾千となく花のやうに光つて
この山奥の人を驚かした

おお此の見事な成功！
私は小踊りして友と握手した
友は新しい科學の光を

いま「書物」から「實行」に現した

黑い雀　白い雀

湯本の山
山の麓を走るトロツコ
空を曇らす煤煙
湯本の雀は眞黑

四つ倉にはセメント會社
セメントの粉は野山に
時ならぬ春靄をひいて
四つ倉は雀も眞白

湯本の雀と四つ倉の雀は
裏山でひよつくり出遭つて
お互に不思議さうに眺めて
果ては大喧嘩をしました

白人は黑人をいぢめる
まさか其の眞似ではありますまいが
お互にもつと仲よく
裏山で遊んだらいいでせうに

雲雀の巣

ぴつちこ　ぴつちこ　雲雀(ひばり)さん
雲雀さん　どこへゆく
麥の畑の巣を出でて
たかいたかい青空に
囀ずる歌の樂しさう
あの太陽の側ぢかに
雲雀の御殿でもあるの

いいえ　さうではありません
見下す春の野も山も

玩具のやうに小さくなり
馬は蟻ほど人は芥子粒
家は將棋の駒のやう
霞む上にて歌ふのは
樂しいからではありません

麥の畑の巣のなかの
卵が無事に孵化るやう
それまで誰にも取られぬやう
心配しながら歌ひます

飛行機

飛行機二つはるばると
はじめて田舍の町に來て
遠くへとんで行つたとき
みんなが寄つて言ひました
「鳥よりも速いね」
「雲よりも高いね」
「乘つてる人はえらいね」と
おどろきながら言ひました

敬一さんも言ひました

「飛行機で東京へ行きたいな
東京が何處か知らないが
飛行機がよく知つて居て
私を連れて行くだらう」

浦島太郎の龜のやう
行く先をよく知つて居て
愉快なところへつれてゆく
そんな愚ロな飛行機が
もしもこの世にあるならば
私も乘つて見たいもの

小犬のライちやん

初雪の朝に「郵便」と
外緣になにか投げた音
見れば手紙も何にもない
ふしぎなこととよく見れば
向ふを向いたライちやんが
手紙くはへて歩いてる

「こらライちやん」と叱つても
平氣で向ふに遠ざかり
ちらとふり向くそのロに

ふしぎや何にも見えません
「ライちやん手紙をどうしたか」
いくらさがせど雪の上
手紙の見えぬ不思議さよ

細い綺麗な字で書いた
白い封筒は雪の上
ライちやんくすりと笑つてた
軒の雀も囃してた
さても上手な手品ぶり

澁澤青花

春の雪
春の歓び
かたつむり
入道雲
僕の電車

春の雪

そよそよ渡る春の風
「おやもう春がやつて來た
いよいよ俺の世界だ」と
穴を出て來た青蛙

顔にひいやり落ちたのを
何かと見れば春の雪
「おお冷めたい」と頭をば
抱へて穴へ逃げもどる

そよそよ渡る春の風
「ああもう春になつたのだ
野山に出でて遊ばう」と
外へ出て來た武夫君

顔にひいやり落ちたのを
何かと見れば春の雪
「おお寒む小寒む」とちぢかんで
又も炬燵へ潜り込む

春の歡び

コロ　コロ　コロ

親の無い子の三吉は
何が面白くてか今日も亦
士手へ來ては草の上
コロコロコロと轉げ落つ

コロ　コロ　コロ
友達もなしに唯獨り
何が面白くて轉げ落つ
頭を石に打ちつけて
瘤が出來ても知らぬけに

草のしとねの心地よさか
それとも堇たんぽぽと

咲き出でし花の嬉しさか
野には心をそゝるやうに
春の風が吹いてゐる

かたつむり

ざあざあ雨の降る中を
大事なお家背にしよつて
押し流されじと蝸牛
笹の葉うらに縋りつく

笹の葉末はゆらゆらと
風にゆらめく大地震

桑原　萬歳　萬歳樂

蒼くなつたる蝸牛

地震と洪水にせめられて
どつと落ちたは地獄かや
いゝえお庭のかたすみの
やはらかい衾の苔のうへ

入道雲

梅雨のあがつた大空に
待ちかねたやうにムクムクと
梅雨霽れの日をテカテカと

強い夏日が照つてゐる

僕の電車

線路を二本畫いて
電線を畫いて
箱の車に
輪が四つ
上をポールで
斜めにつなぐ

お父さんも乘せてやろ
お母さんも乘せてやろ

兄さんも
姉さんもお乗り
僕の電車は
ボギー車だ

島木赤彦

杉
仔犬
金魚賣
柿の木
雀
あられ

杉

野中に立てる一本杉
見れば見るほど見上げるほど
眞直に伸びた幹の勢ひ

高い幹から張り出す枝
張つて張つて張り出して
枝を重ねる枝の勢ひ

ごらんなさい土の下から
土を裂いて盛り上がつて

水を吸ひあげる根の勢ひ

土が深くて泉が湧き
杉が高くて雲が動く
百年千年日の通る道

仔犬

赤い仔犬
乳飲み犬
自分の尻尾に
じやれついて
まはるまはる

くるくるまはる

まはれまはれ
一づにまはれ
自分の口が
自分の尻尾に
とどくまで
いつまでもまはれ

金魚賣

苗代　田圃
田の中の小村

金魚屋さんの呼び聲は
村の端から端までとほる

村は草家欅が高い
高い欅の若葉の下を
金魚や金魚と呼び歩いて
田圃に出ぬける金魚屋さん

金魚屋さんの笠は
大きくて白い
お山の雪は
遠くて光る

柿の木

霜の降るのは霜月十二月
赤い木の葉がはらはら落ちて
空は晴天草家のうへの
柿の木の實に朝日があたる

柿の木の果に梯子をかけて
柿は搖すれるお仙はのぼる
高い枝から遠くを見れば
村の向うの湖水が青い

女をかしや柿の木の上で
柿を摘んで小籠に入れる
草を背負うた若衆たちが
お仙お仙と笑うて通る

雀

柿の木の枝に
雀三つゐる
捕れぬかなあ

三つながら
こちら向いてる

捕れぬかなあ

三つながら
平氣な顔して
こちら向いて
捕れぬかなあ

霰

板の小橋で霰が跳ねる
跳ねてころげて踊ををどる
踊をどらば板のうへで踊れ
板のひびきで音頭が要らぬ

渡りかかる小僧でござる
小僧もとより正直なれば
丸い頭で霰を受けた
受けた霰がやつこらさと踊る

やつて來たのはお仙でござる
お仙もとよりおてんばなれば
板の小橋をかたかた駈ける
駈けるころげる霰が踊る

踊をどらば板の上でをどれ
板にかたかた足音立てて

おもしろいぢや小僧とお仙
そこで霰がやつこら　すつこら踊る

霜田史光

お星さん
雨の唄
ほほじろ

お星さん（子守唄）

きれいな　きれいな　お星さん
金の鈴　銀の鈴　お星さん
あなたの姉妹（きょうだい）は幾人よ
九千九百數知れぬ

きれいな　きれいな　お星さん
坊やのお年は幾つでしよ
今年は三ツ　來年四ツ
その先や遠くて
數知れぬ

金の鈴　銀の鈴　お星さん
鈴振りや樂しい夢が出る
その夢坊やに下さいな
坊やは從順（おとなし）で眠ります

雨の歌

軒場で　ピアノの
音がする
屋根で　ピアノの
音がする

雨のピアノが
彈く唄は
誰かに聞いた
節のよな

思ひ出したよ
母アさんが
荒川べりの夕暮に
いつも吹いてた口笛の曲

ほほじろ

ほほじろが

ほほじろが
夢に現れ
歌ふには

「あの山こひし
森こひし
山の奥の
母こひし」

可哀さうにと
夜明に起きて
籠の小鳥を出してやり
涙ながらに送り出す

それから後は
野にも山にも
歌ふをきけば
皆んなわたしの
ほほじろばかり

童謡の歴史的研究

西川勉

I 童謡の第一義
　兒童の口を衝いて自然に溢れ出る韻律的表現
II 大人が童謡を作ることの是非
　大人の精神と兒童の精神の一致點
III 童謡の始源と語義の變遷
IV 古事記の「腰裳服せる少女の歌」
V 日本書紀の童謡
VI 鳥羽天皇御幼時の童謡
VII 鎌倉時代の童謡　落首との關係

VIII 室町時代の童謡、蓮如上人の「子心唄」
IX 德川時代の童謡、俚謡との接近、寶暦明和頃の童謡、良寛和尚の「毬唄」
X 明治時代、童謡の種類
XI 大正時代、童謡の勃興と復興運動、現今の童謡作家各自の特色、自分の童謡制作心理
XII 童謡價値論

I

大事なお月さま
雲めが隱す

とても隱すなら
金屏風で隱せ

これは月が叢雲に隱された時、兒童が月に對する愛惜の情を謠つたものである。

わしの影するものは
西の山へ連れてつて
鯨燒に燒いてくりよう

冬のうそ寒い日、日向ぼつこをしてゐて、誰かに日光を遮られた時、かう謠つて、輕い怨みと呪ひを浴せ懸けるのである。

これらの二篇の實例に徵しても判るやうに、兒童の口を衝いて自然に溢れ出た童謡には純一な美しさが籠つてゐる。

童謡といふ言葉の本來の意義は、文字通りに、兒童の口を衝いて自然に溢れ出た韻律的表現のことでなくてはならない。また、さうして自然に生れた童謡には、藝術的價値の有るものが多いやうに思はれる。

兎　うさぎ
何見て跳ねる

十五夜お月さん
見て跳ねる

短い端的な詞句の中に、豐富な感情と潑剌たる聯想の飛躍が表はされてゐるではないか。

然し、これらの童謡が、最初からこの通りの藝術的形式に謡はれたものか、それとも兒童の口から口に傳はつて行く間に、洗練され、彫琢されてこれだけの韻律美を發輝するやうになつたものか、今日では何れとも判定し難い。また、最初の作者が大人であつたか、兒童であつたかといふことも、敢て疑はふとすれば疑へないことはない。か、これらの童謡に現れてゐる感情と、それを表現する媒介者（ミディアム）に依つて、私には自然

に兒童の口を衝いて出た謡であると思はれるのである。既に兒童の創作であるとすれば、最初からこれだけの藝術的形式を持つてゐたものではなくて、兒童の口から口に傳はつて行く間に、自然に彫琢されたものであるにしても、或る一人の兒童の推敲に成るものと同一に取扱つて差支ないであらう。作者が兒童の魂であり、推敲者も亦さうだからである。

II

最近の童謡復興運動は專ら大人の手に依つてなされた。其處に一種の矛盾がないであらうか？　かういふ疑ひを抱いてゐるものがある。三十歳の成人は飽までも三十歳の成人であつて、兒童の心理に立ち還ることは出來ない。淺薄なる懷疑家はかう云つて非難する。この議論を押し進めて行くと、大部分の藝術的表現が矛盾と撞着に充ちた奇怪至極なものとなるであらう。三十歳の藝術家は三十歳の人間しか描けず、六十歳の老人は彼の青年時代の回想を描く資格だにないことにならう。こんな馬鹿な話が

あるだらうか。人間の心靈は永遠の幼兒であつて、而も不老不死の成人である。知識と經驗の收穫は、物を視る眼を根本から變へるものではない。寧ろ、兒童の間に本能的に持つてゐた理解力と觀照力を培ひ育てるものである。知識も經驗も何一つ外部から與へ得られるものではない。兒童の頃から、人間の精神が外部に溢れ出て自然に形成されて來る徑路が經驗であり、それに依つて得た系統的記憶が知識である。吾々の心靈は或る瞬間にかうした經驗の徑路と記憶の收積を蟬脫して、單純な本能的狀態に還ることがある。さうして疲勞を忘れ更に潑剌とした彈力を持つやうになるのである假に、忘却の刹那と云はう。恰も湯を浴びて出て來た時のやうな心もちである。かういふ忘却の刹那の成人の精神は、あらゆる經驗と知識の桎梏を脫して極く本能的に純一になつてゐる。兒童の精神は常にこの狀態に在つて成長を續けてゐるのである。此處に成人の精神と兒童の精神と一致する姿が認められる。かうした場合の成人の興味は兒童の興味と一致し、かうした場合の成人の口を衝いて出る韻律的表白は自づから童謠になるのである。其處に多少の知識と經驗の影が差してゐるにしても、大して妨

げになるとは思はれない。前にも云つたやうに本當の知識は兒童の頃から持つてゐた本能的知覺の意識であり、經驗はその本能の發育の徑路に過ぎないからである。兎に角、成人の精神が兒童の精神と一致し、成人の興味が兒童の興味と一致する刹那を吾々は屢々經驗する。かうした刹那の成人の精神の韻律的活動が童謠を生むことになるのである。

それでは詩と童謠の區別は何うかと云ふものがあらう。動機は同じであつても好い異つてゐても好い。大人の作る童謠は、前にも述べたやうに、忘却の刹那の謠であるが、詩になると、もつと複雜な精神活動を伴つてゐるのが常である。複雜なる精神活動を伴つてゐない詩が直ちに童謠であると思つてはならない。塵埃は不潔である。然し、不潔であるものが直ちに塵埃だとは云へないから。或は詩と童謠との境界が朧氣に見えて判り難いと云ふものがあるかも知れない、さういふ人には虹を見よと云ひたい。青い色と黃ろい色との間の境界が明瞭に見分けられない時にでも、全體としての青と黃は瞭然と見分けられるではないか。

四

日本の童謡の始源は古く、且つ遠い。最近の復興運動以前の童謡だけを輯録しても恐らくは數卷の大册をなすであらう。それらが悉く兒童の口を衝いて自然に溢れ出たものではない。成人の手に依つて書かれたものが隨分澤山ある。作者の判つてゐるものもあれば、作者の判らないものもある。成人の精神から生れたこれらの童謡が、直ちに悉く、兒童の精神と一致するものばかりではない。俚謡とか民謡とかの範圍に屬すべきものが澤山混じてゐる。然し、童謡の從來の定義は必ずしも、今日の吾々の考へる兒童の謡といふ意義ではなかつたのである。

ずつと上代には、童謡といふものが一種の神秘的豫言であつたのである。國の變亂時代の移風を豫言したもので、誰れ謡ひ出すとなく路上の子供たちが謡ひ歩いたものが、即ち、童謡と云はれるものであつた。童謡といふ言葉が我が國で最初に用ゐられたのは日本書紀の皇極天皇の條下である。崇神天皇の十年に、大彦命が大和國和珥坂

に到る時、路傍に立てる一少女の歌を聞いて、謀叛人の存在を知つたといふ史實とその少女の歌は古事記にも日本書紀にも出てゐるけれど、未だ此處では兩書とも童謡といふ言葉を用ゐてゐない。唯だ、その歌は、皇極記以後の童謡と全く同種類のものであるから、これを童謡の濫觴と考へる人が多いのである。私も亦、事實としては、これが童謡の濫觴であるといふ説に一致する。然し、この時代の童謡の意義は、今日のそれとは可也異つてゐる。或る者は諷刺的流言と解し、他の者は單なる流行小唄の義に解してゐる。日本書紀時代の童謡の意義に就いては、橋守部の解釋が一番面白いやうに思はれる。「新撰字鏡」では、童謡を單に和佐宇多と訓してゐるが、守部はそれを和邪宇多と解して、かう定義してゐる。

——童謡とは、時の異變を、善惡ともに、神の謡はしめ玉ふを云ふ。和邪とは神態の和邪なり。

勿論、神が謡はせたといふやうなことは信ぜられないだらうけれど、誰れ謡ひ出すとなく流行した童謡が、悉く豫言的意義を含んでゐるのだから、かういふ風に神秘的

に解釋を下すことも面白いだらうと考へる。この際、神といふ言葉を民心、或は國民の豫言的知覺力といふ意味に取れば誰にも諾はれることであらう。

上代の童謠の意義はこれで大抵判るであらう。それから後代になつて來ると、時事世相の諷刺を目的とし、德川時代になつて恐しく俚謠と接近してゐる。然し、俚謠乃至民謠は大抵その時々に新しい一定の節を以て謠はれたものであるが、童謠にはそれがなく、各自勝手な節を付けて謠つたもので、素より樂器に合せて謠ふものではなかつたのである。其處が普通の流行小唄とも違ひ、俚謠乃至民謠とも異るところであつたやうに思はれる。然し、內容に於ては、恐しく俚謠に近付いてゐるものが多かつたやうである。然し乍ら、寶曆、明和の頃になつて、純粹に兒童の謠といふ意味の童謠の傑れた作品がぽつぽつ見られるやうになり、明治三四十年代の頃までは、全國の津々浦々に童謠の勢力が浸透して行つて、兒童の感情生活を豐富に培ひ育ててゐたのである。これが唱歌全盛前の狀態であつたのである。これから、歷史的に童謠の實際に就いて研究することにしよう。

IV

多少煩雜でも、古事記と日本書紀の童謠を全部此處に輯錄して、大體の解註を加へて見たいと思つてゐる。これは研究家の便宜を計りたいといふ希望からであるが、煩はしいと思ふものは、この一章と次の一章を拔かして讀んで呉れても差支ない。

古事記には、前にも云つたやうに、童謠と銘を打つたものは一篇もない。唯だ「水垣宮卷」に童謠と見做して好いものが一篇あるばかりである。

古波夜
美麻紀　伊理毘古波夜
美麻紀　伊理毘古波夜
意能賀袁袁
奴須美斯勢牟登

斯理都斗用
伊由岐多賀比
麻弊都斗用
伊由岐多賀比
宇迦迦波久
斯良爾登
美麻紀　伊理毘古波夜

即ち、この一篇である。前文には「大毘古命罷往高志國之時、服腰裳少女、立山代之幣羅坂而、歌曰」とある。

古波夜（コハヤ）は、美麻紀伊理毘古波夜の句の末端を載り取つて上に置き、歌の調子を強めたのである。美麻紀伊理毘古（ミマキイリヒコ）は、崇神天皇の大御名で、漢字に直すと、御眞木入日子とも、御間城入彦とも書かれてゐる。波夜（ハヤ）は倭建命の「阿豆麻波夜」（アヅマハヤ）と云ふのと同じく、危ぶみ歎く言葉である。意能賀袁袁

（オノガヲヲ）は、己が緒のことで、己が命といふ意味である。凡て物を續け持ちて絶えざらしむる物を袁と云ふと、本居宣長は解釋してゐる。玉の緒といふのも、この意味からである。意能賀は、御眞木入日子の己がである。奴須美斯勢牟登（ヌスミシセムト）は、竊み將殺の意味である。斯理都斗用（シリツトヨ）は、自二後戸一である。但し、斗は清音だから、濁つてはならない。伊由岐多賀比（イユキタガヒ）の伊は發語で、行違ひといふこと、麻弊都斗用（マヘツトヨ）は、自二前戸一のこと、宇迦迦波久（ウカガハク）は、窺はく、伊由岐多賀比は前の通りで、これは皇居の後門に倚つたり、前門に忍んだりして、出入の人目を窺ひながら、彼方此方へ避け違つて窃かに中へ入らうと窺ひ狙つてゐる狀態を云ふのである。斯良爾登（シラニト）は、不レ知とである。爾は（ヌ）の轉用で、知らぬこととての意味、美麻紀・伊理毘古波夜と繰返したのは、歌の調子を強め、歎く心を強く表はしたのであらう。これを書き直すと次のやうになる。

こはや
御眞木入日子はや
御眞木入日子はや
己が緒を
竊み殺せむと
後戸よ
行き違ひ
前戸よ
行き違ひ
窺はく
知らにと
御眞木入日子はや

御眞木入日子命、卽ち崇神天皇は、自分の命を窃かに縮め奉らうと狙つて、皇居の

前門や後門から、出入の人々と行違ひ走せ違つて窺つてゐる謀叛人の在ることも知らないでゐられる、お危いことだ。——一篇の意はかういふ意味で、武埴安彦と吾田媛の反逆を豫言したものである。四道將軍の一人として北陸道に派遣される事になつた大彦命が、既に磯城(シキ)の都を出發して、古事記では山代の弊羅坂、日本書紀では大和の和珥坂の上に達した時、一少女がこの歌を歌つてゐるのを聞いて、君側の危險を感じ、一旦水垣宮へ歸つて來るのである。間もなく、武埴安彦と吾田媛の謀叛が、事實となつて現はれ、大彦命は彼等を平定した後に、北陸道へ向つて出發したのである。

V

「日本書紀」の最初の童謠も、矢張、崇神天皇十年に、大和の和珥坂の上で大彦命が聞いた一少女の歌である。史實も「古事記」の「水垣宮卷」と同じく、歌も大同小異である。唯だ解釋は前のと少し違つたのを紹介しよう。

瀰麼紀　異利寐胡播郁
飫廼餓烏塢
志齊務苔
農殊末句志羅珥
比賣那素寐殊望

瀰麼紀異利寐胡（ミマキイリヒコ）は御間城入彦で、即ち崇神天皇の大御名である。播耶（ハヤ）は、前章で述べたやうに、倭建命の「阿豆麻波夜」（アヅマハヤ）と云ふのと同様で、崇神天皇が何の心配りもしないで呑氣にしてゐられることを危ぶみ歎ずる言葉である。飫廼餓烏塢（オノガヲヲ）は、己（オノ）が夫（ヲ）をといふ意味で己は大彦命を喩へて指す。夫は天皇を喩へて申す。志齊務苔（シセムト）は、將〻殺、死（な）せむとである。農殊末句志羅珥（ヌスマクシラニ）は、將〻窃不〻知爾、即ち窃（ぬす）まく知ら（ず）にで、窃かにするを知らずといふ意味。比賣那素寐殊望（ヒメナソビスモ）は媛之

遊爲もで、媛たちの戯れ遊ぶを歎息するのである。碎いて云へば、自分の亭主を窃かに殺さうとしてゐるものがあるのも知らないで、まあ、女たちが遊び戯れてゐる、といふことで、天皇様は危いことだ、四道將軍等が、自分たちの仕奉る大君を窃かに弑し奉らうとするのがあるのも知らずに宮中の守禦を離れて行くのだ、といふ意味で、謀叛の起ることを未然に豫言したものである。これを本居宣長翁の「古事記傳」に依つて解註した「水垣宮卷」の一少女の歌と同様に解釋すれば、飫廼餓烏塢は、己が緒をのことで、天皇の命を指し、末句の媛も天皇御自身を指すことになるのである。さうすると、天皇は御自分を窃かに弑し奉らうとしてゐる人間のあることも知らないで、媛たちの遊び戯れるやうに呑氣でゐられるといふ意味になるのである。またこの謠は一に次の如く書かれてゐる。

於朋耆妬廣利
于介伽卑氏

許呂佐務苔
須羅句塢志羅珥
比豆那柔寐須望

これは説明しなくとも判るであらう。

大城戸より
窺ひて
殺さむと
爲らくを知らに
媛な遊びすも

かうなるので、一篇の意の在るところは上記の二篇と同一である。

此處までの謠は、「有少女歌之曰」とあるきりで、童謠と銘を打つてゐるのではない。それにしても、これは日本の歴史上の童謠の濫觴である。後代の童謠と、その意味を異にするとは云へ、事實上、童謠の濫觴と云つて差支へないのである。唯だ、單に子供の心持ちを表白した童謠としては何れ後段に述べるが、鳥羽天皇の御幼時の「粉雪」の謠を以て嚆矢とせずばなるまい。

皇極天皇二年の「岩の上に」の童謠は、書紀にも、明かに童謠と銘を打つてある。

伊波能杯倆
古佐屋渠梅野倶
渠梅多倆母
多礙底瞻袁羅栖
歌麻之之能烏賦

伊波能林倆（イハノヘニ）は、岩の上に、である。古佐屢渠梅野倶（コザルコメヤク）は、小猿米焼である。渠梅多倆母（コメタニモ）は、米だにも、多礙底騰裏羅栖（タケテトホラセ）は、喫而（たけて）行去（とほらて）で、喫べて通られよといふ意味、歌麻之之能烏膩（カマシシヲチ）は、山羊（かましし）の翁（をぢ）である。

蘇我入鹿臣は、山背大兄王の威名天下に振つてゐるのを妬んで、上宮を焼亡すからその時は、せめて米だけでも食べて逃げなされよ、山羊の翁よ、といふことである。岩の上には上宮に喩へてゐる。上宮は岩石の上に建つてゐたさうである。子猿、林臣即ち入鹿に喩へてある。米焼く、子妻（こめ）焼くに通はせてあつて、上宮王等の妃や子たちを焼く意味だと云はれる。山羊の翁、山背大兄王の頭髪は斑雑で、毛は山羊に似てゐたと云はれてゐる。

これを書き直すと、

岩の上に

子猿米焼く
米だにも
喫（たけ）て通（とほ）らせ
山羊（かましし）の翁（をぢ）

一篇の意は蘇鹿入鹿が、山背大兄王、並にその妻子を焼き殺さうとする陰謀を未然に豫表し、且つ、「米だにも喫けて通らせ」といふ句に依つて、山背大兄王が生駒山中に淹留すること數日に亘り、遂に喫飲を得られなかつたといふ困難な運命に遭遇することを豫言したものである。

波魯波魯爾
渠騰曾枳擧喩屢
之麻能野父播羅

波魯波魯爾（ハロハロニ）は、遙々に、渠騰曾枳舉喩屢（コトゾキコユル）は、琴ぞ聞ゆる、之麻能野父播羅（シマノヤブハラ）は、島の藪原で、蘇我の大臣の宅地の在るところで、一篇の意は、もう暴逆なる蘇我の大臣の宅地は藪原に歸したやうなもので、其處から神の彈き給ふ藪原の琴の音が聞えて來るといふことである。蘇我一族の滅亡の豫言である。

遙々に
琴ぞ聞ゆる
島の藪原

かうなるのである。

烏知可拖能
阿婆努能枳枳始
騰余謀作儒
倭例播禰始柯騰
比騰曾騰余謀須

これは第一句から順に、ヲチカタノ、アハヌノキギシ、トヨモサズ、ワレハネシカド、ヒトゾトヨモスと讀んで行くのである。

遠方の
粟野の雉子
響さず
吾は寢しかど

他人ぞ譽す

かうなるので、彼方の粟野の雉子は鳴かないが、他に響動するものがあるといふ意味で、山背大兄王が入鹿に滅されたに拘らず、上宮の王等が復讐もせず、寢たやうに靜まつてゐる。然し、他に事を起すものがあるといふ意味で、仲大兄王と中臣鎌子が蹶起して入鹿を滅すことを豫言したものである。

烏麽野始儛
倭例烏比岐例底
制始比騰能
於謀提母始羅孺
伊弊母始羅孺母也

烏麽野始儛（ヲバヤシニ）は、小林に、の意味で、この句は林臣にきかせてゐて、而も宮中を指してゐるのである。林臣は前にも一寸述べて置いたが、蘇我入鹿臣のことである。倭例烏比岐例底（ワレヲヒキレテ）は、引二入我一である。例の字の上に以の字が有る本も見受けられる。我を引き入れ、我を誘き入れることである。制始比騰能（セシヒトノ）は、爲し人のである。爲しとは、如何なる事を爲しと云ふに、上の句の引き入れる企を爲しこと。また、これは令殺にも通じ、令殺は死なせ、殺しの意味で志勢は勢と約るから、制始は殺しともなり、單に爲しの意ともなる。此處では單に引入れる企てを爲しといふ意味と、入鹿を殺す意味と二重に利いてゐるのである。於謀提母始羅孺（オモテモシラズ）は、面も知らずである、顏も知らないこと。伊弊母始羅孺母也（イヘモシラズモヤ）は、家も知らずで、母は歎辭。也は與と同じて、これは嘲笑の言葉である。書紀の本文には、これ即ち、入鹿臣忽ち宮中に於いて佐伯連子麿、稚犬養連網田の爲めに斬らるるの兆なりとある。

小林に
我を引入れて
殺し人の
面も知らず
家も知らずもや

一篇の意は、逆臣入鹿を欺いて宮中の大極殿に引入れて殺す仕組みになつてゐるのに、入鹿自身は、さういふ企てを爲し、且つ自分を殺さうとしてゐる人間の面も知らず、家も知らないのであるわいといふ意味で、衆怨の的になつてゐた入鹿事、林臣の末路を豫言し、且つ嘲笑したものである。

摩比羅矩

都二能倶例豆例一

於社弊陀乎

還四賦倶三能二理レ歌理レ鵜一

美レ和レ陀レ騰レ能レ埋レ歌レ美

甲子　騰二和レ與レ騰美一

烏能陛陀烏

還四賦倶三能二埋レ歌理レ鵜一

この童謠は、古來、眞意を捕捉し得たもののない難解な童謠である。徳川末期の國學者達にしても、遂にこの童謠を解き得たと云ひ切れる人がない。本居宣長翁の「玉勝間」にも齊明童謠の考察あり、橘守部には、「難語考」があつて、この難解な童謠を釋明してゐる。此處に反り點を打ち、讀み方の順序を立てたのは、即ち橘守部の「難語考」に據るものである。意味の解釋も、殆んど全部、守部の說に隨つてすることにしたのである。

然し、解釋に移る前に、この童謠が、政治の衝に當る人々に對する國民の義憤の表白であり、日本最初の國辱の記念であることを附加へて置きたい。或る意味で、國民に依つて爲されたる最初の政治批評と見られる節もないではない。

摩比邏矩(マヒラク)は、眞發(マヒラク)で田地を墾り發くこと。三の句の尾上田に懸る。都能俱例豆例一は、最後に能の字を加へて、橘守部は、第三字から讀んで上の二字に反つて來てゐる。卽ち、俱例豆例能都能(クレツレノツノ)として見るのである。朝鮮の、殊に當時の百濟の地名には、哆唎(タリ)、多羅(タラ)、稔禮(ネレ)、圖禮(ツレ)等、總じてラ行の音に終る地名が少くなかつたから、俱例豆例(クレツレ)も屹度何處かの地名であらうと推斷してゐる。津之(ツノ)は、伊勢の津のといふやうなもので、或る港町か、その近邊の意味である。於社弊陀乎(ヲノヘダヲ)は、尾上田のことで山の丘の平かなる處に米麥などを作る田畑のことである。邏賦俱能理歌理鵝一は、これを上から順々に讀み下せるやうに置き換へると、歌理鵝理能俱邏賦(カリガリノクラフ)とな

るので、雁々の喰ふ事を意味してゐる。此處までの意味は、眞廣く開墾して置いた百濟の土地のくれつれの港の附近の田地を雁々共が來て喰つてゐるといふのである。美和陀騰能理歌美は、これを上から順に讀み下すやうに直すと、美歌理能騰陀和美(ミカリノトタワミ)となつて、御獵の人猶豫みといふことになるのである。御獵の人は、百濟の屯倉地に派遣してあつた我が國の官吏軍卒共を譬へて云つてゐるのである。烏能陛陀烏(ヲノヘダヲ)は、前と同じく、尾上田をといふこと。次の句は、第四句と同じで、歌理鵝理能俱邏賦となるので、雁々の喰ふといふこと。甲子(キノエネ)は、この次から讀み出せといふ符號であると云はれてゐる。騰二和一與一騰美一は、第三字目の與の字を陀の字に置き換へて、上から順に書き下して見れば、騰陀和美騰(トタワミト)となつて、人獵豫(とたわ)みとの意となる。卽ち、御獵人の猶豫のことである。次の句は、尾上田、其の次は、雁々の喰ふである。

これを次のやうに書き替へて見るとよく判るのである。

まひらく
い、、、くれつれの津の
尾上田を
雁々の喰ふ

御獵(みかり)の人猶豫(とたわ)み
尾上田を
雁々の喰ふ

（甲子）
人猶豫(とたわ)みと
尾上田を
雁々の喰ふ

かういふ風に三段に分けて讀んで始めて古代の歌調をなすと、守部は說いてゐる。意味も、他の國學者の說に依つて解釋すれば別として、橋守部を信用する限りに於いて、これで判ると考へる。

この童謠の中で、雁々と云つてゐるのは、新羅(しらぎ)の軍卒共を喩へてゐるので、御獵人は、前にも云つたやうに、百濟(くだり)の屯倉地に派遣されてゐる皇軍を指してゐるのである全體の譬喩と諷刺は、これまで屬領地になつてゐた百濟の屯倉地の我が官吏や軍卒共が猶豫し倦怠してゐる間に、新羅の國の軍隊が、曾て皇軍が眞廣く切り墾いてゐた土地に來て荒してゐるぞといふ意味である。これは矢張一種の豫言とは云ふものの、吾々國民の祖先が、當時の官權の怠慢を責め罵り、その爲めに失はれた屬領地を惜しみ悲しむ憤激の涙の籠つたものと考へることも出來るのである。或る意味から云つて、吾々國民の最初の國辱の記念である。齊明天皇筑紫に行幸して皇軍を韓土に送り、敗績して收回し難くなり、次の天智天皇の時代になつて遂に三韓を絕つの史實を考へ合

せて見ると、この童謡の意味が、一段と明瞭になるだらうと考へる。

それから、この童謡に限つて何故、文字の置き方を變へたり、讀みづらく、理解しがたく書いたかと云ふに、言葉の禁忌に觸れるので、皇室に對する遠慮からであらうと思はれる。何故といふに、これまでの童謡は、皇室にも、天皇にも決して不面目とはならなかつたから、はつきり書いてよかつたのであるが、これは稍、齊明天皇の御字の不面目を表してゐるからである。

天智天皇九年夏の四月、法隆寺炎上の前に歌はれた童謡がある。

于知波志能
都梅能阿素弭爾
伊提麻栖古
多麻提能伊韡能

野韡古能度珥
伊提麻志能
倶伊播阿羅珥茹
伊提麻西古
多摩提能伊韡能
野韡古能度珥

于知波志野（ウチハシノ）は、打橋ので、次のつめの枕詞になつてゐる。都梅能阿素弭爾（ツメノアソビニ）は、集の遊びにといふことである。橋詰、橋爪の意から、集合の集めに便音で係つて來たのである。伊提麻栖古（イデマセコ）は、出でませ子である。多麻提者伊韡能（タマテノイヘノ）は、玉手の家のであつて、玉手は法隆寺附近の地名で、此處の家は法隆寺を指す。野韡古能度珥（ヤヘコノトニ）は、八重込の外にといふことである。伊提麻志能（イデマシノ）は、出でましのである。倶伊播阿羅珥茹（クイ

ハアラニゾ）は、悔は有らにぞといふことである。伊提麻西古（イデマセコ）は、前の通り、出でませ子。多摩提能伊牌能（タマテノイヘノ）は、矢張、前と同じく、玉手の家、即ち法隆寺のことである。野鞞古能度珥（ヤヘコノトニ）は、また同じく、八重込みの外にの意味だから、前の通り、全體の意は、やがて法隆寺が炎上するであらうから、七堂伽藍の八重込の寺坊にゐる人々よ、八重込の外に出でませよ、出でましの悔はあるまいからと、いふである。

打橋の
集めの遊びに
出でませ子
玉手の家の
八重込の外に
出でましの

悔ゐはあらにぞ
出でませ子
玉手の家の
八重込の外に

かう書けばよく判るであらう。法隆寺の炎上が夏五月とあるから、それから二三箇月前に謠はれたものであらうと云はれてゐる、集めの遊びといふものが、春の三月頃の野原で行はれたので、多分その頃に、男女の兒童等が謠ひ歩いたものだらうと思はれる。

多致播那播
於能我曳多曳多
那例々騰母

陀麻爾農剱騰岐
於野兒弘儛農倶

多致播那播（タチバナハ）は、橘はである。於能我曳多曳多（オノカエダエダ）は、己が枝々のこと。那例々騰母（ナレレドモ）は、成れれ共、陀麻爾農炤騰岐（タマニヌクトキ）は、玉に貫く時、於野兒弘儛農倶（オヤシヲニヌク）は、貫二同緒一である。即ち、橘は己が枝々、成れれ共、玉に貫く時、同し緒に貫く。これが表面の意味である。蓋し、大友皇子が沙多紹明、其他朝鮮からの歸化人を重く用ゐて榮爵を與へ、同じ朝廷の臣列に置いたことを諷したものである。

美曳之弩能
曳之弩能阿喩
阿喩擧會播

施麻倍母曳岐
愛倶流之衛
奈疑能母騰
制利能母騰
阿例播倶流之衛

これは、ミエシヌノ、エシヌノアユ、アユコソハ、シマベモエキ、エクルシエ・ナギノモト、セリノモト、アレハクルシエ、と、讀んで來る。

御吉野の
吉野の鮎
鮎こそは
島邊も吉き

え苦しゐ
水葵の下
芹の下
吾は苦しゐ

かうなるので、一篇の意味は、大海人皇子(天武天皇)が東宮に在ず頃、天智天皇が大友皇子に皇位を譲らうと思召してゐられることを察し、剃髪して吉野に入らせられて苦しまれることを諷して謠つたものである。

於彌能古能
野陛能比母騰俱
比騰陛多爾
伊麻施蘓柯爾波
美古能比母騰矩

臣の子の
八重の紐解く
一重だに
未だ解かねば
皇子の紐解く

天智天皇が崩じ給ひ、遂に壬申の亂となり、天武天皇の諸將、即ち臣の子達が、近江の都を八重に取り圍んだ時、大友皇子がその圍みを解き破らうとすべきに、未だ一重だに解かない中に敗走することを豫表したものである。

阿箇悟馬能
以喩企波波箇屢
麻矩儒播羅

奈爾能都底舉騰
多拖尼之曳鷄武

（赤駒の
行憚る
眞葛原
何の傳言
直に鷄、告けむ）

大友皇子が眞葛原に行き憚る赤駒のやうに、行くことを憚つて、天武天皇に會はれようとしないけれど、流言などに怯えずに、直かに御目に懸つて和睦なされば好いだらうに、といふ意味である。

書紀の外に、續日本紀・日本後記、三代實錄等にも童謠を散見するけれど、これらの所謂「本朝六國史」中の童謠は、日本書紀中の童謠と同意義のものであり、且つ・書紀所載のものが代表的なるものだらうと思はれるから、他のものは省くことにする。

VI

鳥羽天皇が御幼時に、雪の降るのを眺めて、當時の童謠を謠はれたことが、讃岐曲侍の「日記」にも「徒然草」にも見えてゐる。

降れ
降れ
粉雪

たまれ
粉雪

垣や
木の
股に

自然に兒童の口を衝いて溢れ出た韻律的表現といふ意味の童謠では、日本の文獻に存する限りでは、これが最古のものであらう。隨つて、今日の吾々が意味する童謠、及至幼年詩(誰の作とも判らないけれど)は、これを以て嚆矢とせずばなるまい。

丹波の
粉雪

中の一聯をかう書いてゐるものもあるけれど、それは訛傳だらうと云はれてゐる。これに就いては、蜀山人も「新百家說林」の中に於て說き及ぼしてゐる。兎に角、これは極く端的で、素直な、明るい、綺麗な詩である。八百三四十年後の吾々が讀んで見ても、實に淸新な感情を與へられるではないか。吾々と同時代の少年が書いた幼年詩と比較して見て、優らうとも劣るとは思はれない。

VII

一里間町
二間町
三里間町
四間町
私の箱の上には
衞も人もをどり

十方鵜
豆無か餌だよ
黒蛇は源太よ
あめ牛盲目が
杖突いて通る所
それはそこへつんのけ

林道春の「徒然草野槌」の中に、これが鎌倉時代の童謡として載せられてゐる。頼朝の時代か、最明寺時頼の時代か、どつちかのものだらうと云はれてゐる。意味の不明な箇所は、當時の人名と地名を讀み込んであるので、其處に時事諷喩詩としての面白味があつたのである、吾々には餘り時代が距り過ぎてさういふ特殊の諷喩は判らないけれど、當時の人々には直ぐ何處の誰のことだといふことが判つたのに違ひない。

渡部の
水いかばかり
早ければ
高橋落ちて
隅田流るらん

これは「太平記」所載の童謡であるが、隅田高橋の軍勢が渡部橋で楠の軍勢に破られた時の落首を京童が謡つたものださうである。

以上二篇の童謡に就いて見ても判るやうに、この時代の童謡は專ら時事世相の諷刺に止つてゐる。

坪内逍遙氏の戯曲「名殘の星月夜」の中で謡はれる童謡も矢張諷喩の意味を持つてゐる。然し、これは坪内逍遙氏の創作なのか、それとも何か當時の文書に據所のある童謡なのか、何れとも決定し兼ねたので此處には收錄しないことにした。兎に角、時事

世相の諷喩と或る豫言的意義を含んだものであつたことだけは確實である。

かうして童謠が時事世相の諷諫を內容とするやうになつて、落首と趣を同じくするものが多くなつたことは注目すべきことである。

將門は
顯顯よりぞ
切られける
俵藤太が
はかりごとにて

これは「平治物語」所載の將門梟首の時の落首であるが、これと前述の「渡部の」の童謠とを比較して見ると、兩者の間に一脈相通ずる味はひの存する事を覺ゆるであらう序でながら、落首は童謠の變形の如く考へる人もあるけれど、事實さうとは思はれな

い。童謠は最初豫言的意義を持つたものであり、落首は單に時事を諷諫し、高官貴紳の榮枯盛衰を毀譽したもので多くは過去及び現在の事實を題材とするものであつたのである。落首の起源も古く、嵯峨帝の時の落書（群書類從六百二十八）が始見である。後世に至つて、この形式は國民の政治、社會批評の表白にも、亦、政治上の國民的希望の表白にも用ゐられるやうになつた。時事の諷刺、高官貴紳の榮枯盛衰の毀譽に用ゐられることが、云ふまでもなく、最も多かつたやうである。

童謠と落首の關係は何うかと云ふに、後世に至つて、落首が流行するやうになつてから、時事世相の諷刺を內容とする童謠が大變少くなつたことを注目すべきであらうかうして童謠は次第に兒童の謠といふ第一義に歸らうとする傾向が見えてゐるである。德川時代の中葉以後に至つて、純粹の第一義的童謠が盛になつて來た原因の一つに、落首の發達といふことが、上述のやうな意味で認められはしないだらうか。

室町時代の童謡で今日に殘つてゐるものは蓮如上人作の「子守唄」と、謠曲の中で斷片的に散見するものばかりである。此處には蓮如上人の「子守唄」だけを輯錄する。

やしようめ
やしようめ
京の町に
やしようめ
賣つつるものを
見しようめ

防門町に賣るもの
くきゐかもちはんろくて
一口なれどてうほう
在京人の目の毒

九條の町まで
あもと云うて通るは
すや殿のことかや
店へ出いて置賣り
いただいて算み賣り

山城の國から持て出て賣るもの
胡瓜　細根
白瓜　茄子
瓠　甚瓜

あこた瓜に　ほた瓜
唐瓜に姫瓜
さこそ味のあるらめ　菜賣らう
にてうらう　大根賣らう

河骨蕪　賣らう　蕗賣らう

をあへめせといふ聲
しほなくぞ聞えた
とつころうらん　山の芋に里芋
春の野にあるなる
かがみいづる早蕨
ゆきのひ丁にをせたる
つくづくし賣らうよ
一もじすぎなくくだち
淺葱も賣らうよ

六角町に賣るもの　賣るもの
鯉　鮒　鯛と鱸と　石班魚　比目魚

鯰と　伊勢鯉と　鮨と　螺や　榮螺
名吉の子　鮑　鰹　鯛と
正月に祝ふは　柿や俵あいきやう
ひしやめはもちうり
鰆の子は切り賣り
蛸の手も八つ　烏賊の手も八つ
乾蛸も賣らうよ

坊門町に賣るもの
きんてう　山鳥
山鳴　田鳴と
鶉と　鶴
鴻
雁と

鴨と　鶴と
味は雀てうない
白小鳥も賣らうよ

地獄の辻から　風が辻を見わたし
室町を通れば
うらうらるまいは
上萬さまの御ことか
十七八から二十に餘て
二十四五の上萬
蓬々眉に薄化粧
はさきとつて鐵　黑
立ちに立ちてまします

我等がやうなるあつなし
わたもいらぬすすあう
せのひぼにきないて
紺の十徳
上にそつと着そうて
杉形の傘をば深々と着そうて
吹けど吹かねど尺八　腰についさし
上萬さえの御側をよしよしとほた

その時御上萬袂をじつと留めて
御止りあれや殿御とて
笑靨はしほにあまつた
料足の一文　かたわれも持たねど
男の義理なれば

まづ御名を問ふた

これなる上藹の名をば何と申候
はつはなと申候
春の初に面白や　はつはな
これなる御上藹の名をば何と申候
あたらし殿と申候
あたらし殿と聞くより
いまいでと思うて
そと寄て見たれば御名はあたらし
御顏は古う御りやる

さもあれ
いかほどの御出ぞ

禮式のさぶらう
禮式のこととは
一すぢの御事か
思ひもよらぬことなり

われさもさぶらはずば
ほうらくの御連歌
御連歌とは　五十文の御事か
思ひも寄らぬことかや
われさも候はずば
伊勢への御まゐり
御まゐりとは
みわたりの御事かや
おもひもよらぬことなり

われさも候はずば
大名の御かど
御かどとは　五文(御門)のことかや
思ひも寄らぬことなり
われさも候はずば
御寺さまの御かど
御かどとは　三文(山門)のことかや
時々のあきなひに
あれかるをえらしめ　えらしめ

この子守唄は、蓮如上人自筆のものが、京都の淨土眞宗の寺、順興寺に今なほ殘つてゐるさうである。

本文の寫しは假名で書いたところが多かつたけれど、私が讀み易いやうにと思つて

漢字に書き直して振假名をつけたところが少くない。此處に斷つて置く。それから、この歌の發端の句「やしようめ　やしようめ」は、「寢(やす)め　寢(やす)め」の意味かと思はれる。意味の不明な箇所も幾つかあつたけれど、總て其儘にして置いた。

然し、この子守唄は蓮如上人の作といふところに興味があるだけで、別に傑れたものだとは考へられない。魚盡しや鳥盡しのやうなところも、何となく商賣往來染みてゐはしないだらうか。上人は、或は、子守たちにそれを敎へる積りで書かれたのではないだらうかとさへ疑はれる。後段の上臈との問答の洒落も面白くないことはないが特に奇拔な譯ではない。同じ僧侶の作つた童謠としては、良寛和尙の「山寺の和尙さん」の毬唄の方がずつと藝術的に傑れてゐるやうに思はれる。

室町以後、德川時代までは、所謂暗黑時代になつて、文獻に殘れる童謠などは殆んど見られない。また、この時代に、室町の童謠が全く忘却されたり、或は記錄に殘つてゐたものも兵火の爲めに散佚したのであらう。

IX

徳川時代の童謡で、最も古いものは「尾張名所圖會」所載の「及びなけれど」の謡であらう。

加藤清正が名古屋の天守臺を築く時、多くの美少年を狩り集めて、萬松寺を彼等の旅宿に當て、大石を運搬する際など、その石の上に毛氈を敷いて、きらびやかに着飾つた美少年隊を乘せ、音頭を取つて歌はせて勢ひを付けながら、大石を運搬させたといふことが、史實として傳へられてゐる。

及びなけれど
萬松寺の花が
折りて一枝
ほしごさる

これがその頃流行した童謡である。童謡とは云ふものの、餘程俚謡に接近してゐる無論、兒童の作つたものではない。當時の青年間の男色の嗜好が仄かに現れてゐるではないか。

降つて徳川第九代家重、十代家治の時代、即ち寶暦明和の頃になると、童謡が甚だ盛に行はれたやうである。

おらが隣りの爺さまが
あんまり子供をほしがつて
京都鼠をとらまへて
月代剃つて髪結つて
あすは御城の御普請で
牡丹餅賣に出たれば
石垣なんどのあはひから

隣りの三毛猫お出やつて
牡丹餅ぐるみにしてやつた

餘り上品ではないが、輕い滑稽味の中に一脈の哀愁を湛へてゐるではないか。

お萬が紅
鰯雲

若い女の唇に塗けてゐる紅を見て、直ちに日に燒けて紅くなつた鰯雲を聯想したものである。

ねーんねーん　ねんねこよ
ねんねのおもりは何處へ行た

山を越えて　里へ行つた
里の土産に何貰ろた
でんでん太鼓に笙の笛
起きやがり小法師に振り皷
ねーゐん　ねーゐん　ねんころり
ころころ山の兎は
何故にお耳がながござる
親のお腹にゐる時に
枇杷の葉喰べてながござる
明日は疾からおひんなれ
赤の飯に魚添へて
ざあんぶざんぶと上げませう
ねーゐん　ねーゐん　ねんねこよ

この有名な子守唄も、寶暦明和時代のものだと云はれてゐる。

おーにぶくろー
ちゃんぶくろ！
むうぎのゐのゐんぶくろー

これは當時の鬼ごつこの謠であるが、意味は汲み取れないけれど、かう謠ひ囃しながら群童が、目隱し鬼を取り廻いてゐる姿が直ちに眼の前に浮んで來る。

鬼になつたとて
腹立つものは
十五夜の月の
餅片泥坊と囃された
しんまい數の子

ひねならそちへ
おんのきやれ

これも當時の鬼ごつこの謠であるが、この方は意味もよく判る。氣早い、口の惡い江戸つ兒の子供たちが喚き立てゝ遊び戯れてゐる姿が手に取るやうに見えるではないか。

唐のなあ
唐人の寢言には
あんなんこんなんほろくぢうたいおん
まつばかんきよ
すらすんてんすべらんせ
奇妙　妙ぢやに見ておんじやう
話したことぢやがて來て見やれ

ちんがら横町のもんがらも
ちがもがそこぢやいな

これは文政の頃江戸に流行した「唐人の寝言」といふ童謡である。朝鮮飴を賣るやうに、安南こんなん飴を行商してゐたものが、節面白く謡つてゐたのを街の子供たちが面白がつて謡ふやうになつたものださうである。

權兵衛が
種子蒔く
烏がほじくる
何事措いても
三度に一度は
追はずばなるまい
ずんべら　ずんべら

これは今日では歌詞に振を付けて花柳界で踊らせてゐるさうであるが、本來は童謡なのである。蜀山人の「新百家説林」の中には、「近頃諸色甚だ高値なり、わけて炭高値なり。」と、前書を付けて、この童謡を掲げてゐる。或は炭の法外な暴騰を諷した意味がこの中に籠つてゐたので、當時の人々にはそれが直ちに理解せられたのではあるまいかと思はれる。

然し、この頃から、江戸文明の爛熟頽廢の時代になるので、兒童たちも卑猥なることを口にすることを好み、それを咎めることも少かつたと見えて、童謡にもさうした感じのものが澤山殘つてゐる。尤も最初は大人が作つて謡ひ始めたものだらうけれど、多くの兒童が面白がつて頻りに歌つたことは明かである。

お仙　お仙と
云うたとて

銀杏娘に
かなやしよまい

これなどは無事な唄である。かの笠森お仙と淺草仲見世の揚弓店お藤とのことを謠つたものである。「事實はお仙の方美なり。」と、蜀山人は註釋を加へてゐる。

娘　納戸で
何してる
……　……

×

臍の下谷に
出茶屋がござる
……

……

これらの二篇に至つては言語道斷である。然し、徳川末期の江戸の兒童がかういふ童謠を喜んで謠ひ歩いたことが、「新百家說林」に見えてゐるのである。

徳川時代の稿を終る前に、良寛和尚の毬唄を掲げよう。

山寺の和尚さんは
毬は突きたし
毬はなし
猫を紙袋に
投りこんで
ええ　ぽんと突きゃ
にゃんと鳴く

ぼぼんぼんと突きや
にやにやんにやんと鳴く
ええ　山寺の和尚さんは……

最後の句から第二句に歸るやうになつてゐるもので、現今は三味線に合して歌はれてゐて、極めて早口に面白く節付されてゐる。

X

明治時代になつて生れた童謡は果して何れ位あるのか、その範圍が判らない。吾々の幼時に謡つてゐた代表的な童謡でも、實は徳川時代から殘つて來てゐたものかも知れない。さういふことを明かに穿鑿することが出來ないから、此處には餘り多くの實例を掲げないことにする。若し、明治時代に諸國で行はれた童謡を詳しく知りたいと思はれる人々には、童謡研究會編の「諸國童謡大全」と、村尾節三氏編著の「童謡」の閲

讀をお奬めしたい。

お月さんいくつ
十三七つ
まだ年や若いに
紅鐵漿(べにかね)つけて
お嫁入りなされ

この童謡の種子が果して何時頃蒔かれたもので、何時頃から謡はれたものか知り難いけれど、專ら明治年間の東京市で謡はれたものである。

向う河岸の
金太郎
頭が三寸長いな

隅田川を降る和船の中に生活する船頭の子が對岸の子供に浴せ懸る惡口のやうな調子で謠ひ出したものである。私の作つた童謠「船頭の子」は、即ちこのリヅムを取つて更に複雜なる藝術的形式に復活せしめたものである。

お山の大將
俺ひとり
後から來るもの
突き落せ

丘の上に登つて、後から登つて來る群童の前に、大手を擴げて謠ふものである。西條八十氏はこれに藝術的幻想を加へて、更に味はひの深い童謠を書いてゐる。何れ、後に述べる積りであるが、最近の童謠運動が、新しい創作の提供に在ると共に、一面、在來

の童謠のリヅムの復興に在つたことは、これらの實例に徵しても判ることだと考へる。

ぢいさん　ばあさん　毛唐人
お腰の曲つたぢいさんだ
お腰の曲つたばあさんだ
結構人のぢいさんだ
結構人のはあさんだ

これは右の手で杖を突き、左の手で腰のあたりを挿へ、からだを前屈みにして、老人の姿勢を裝つて徐歩しながら謠ふものである。詩としての價値よりも、兒童の觀察のユーモラスなところに興味がある。

この外、本論の第一章に掲げた「大事なお月さま」の「金屏風」「十五夜お月さん」の「兎」「わしの影するものは」の三篇の童謠などは明治時代の童謠中の傑出したものであ

らう。(或は徳川時代から在るものかも知れないけれど、兎に角、明治年間に行はれたものである。)

童謡には一體何れ位の種類があるかと云ふに大別して自然觀照の謡と遊戯唄と子守唄とに區別せられるやうに思はれる。羽根唄、毬唄、お手玉、其他無數の兒童の遊戯に伴つて何等かの韻律的表現がある。或は月に對し、雪に對する心持ちの自然に發露したものがある。また背に負つてゐる子供を眠らせようとして謡はれる子守唄もあれば、搖籠に入れて子供をあやしてゐる時の唄もある。動物や自然に對して、遊戯的に働きかける心持ちと觀照心理の交錯を示す童謡もある。然し、吾々にはがういふ種目に依る分類法よりも、表現された心理に依つて、兒童の活動的精神の現れたもの、ユーモラスな感情の現れたもの、恐怖神經の現れたもの、慘忍性の現れたものなどに分けて見る方が一段と深い興味のあることであらう。第一のものには前掲の「お山の大將」の如きもの第二のものには「ちいさん　ばあさん　毛唐人」「向う河岸の金太郎」の如きものなどがある。

おいらの指は
金指
蜥蜴の指は
腐れ指

蜥蜴を見た時、指を隱してから謡ふ子供がある。

われが指
糞指
私が指は
金指
なんぼ嚙んでも
痛うない。

蛇を見るとかう云つて謠ふ少年がある。これらの童謠には、兒童の恐怖感と、呪文に對する一種の迷信が現れてゐるではないか。

ぎやんどん(蛙)
ぎやんどん
何時何時死んだ
昨夜
糧食て
今朝とう死んだ

これは加賀の童謠であるが、穴を穿つて半殺しにした蛙を入れ、毒だめか山椒の葉で覆ひ、その上に小石を載せて、尙、その上から手に持つてゐる小石で打ち叩きながら、この謠を謠ふのである。

鼠鼠　むぐちよ
むぐちよの頭に
火がついた
消しても　消し一
消えきれない

鼠鼠を水中に投じて溺れんとして苦しむ有樣を見ながら、面白がつて、かう謠ふ兒童がある。これらの諸篇には兒童の慘忍性が現れてゐるではないか。さうかと思ふと、また極めて優しい感情の現れたものがある。

螢
此方來い
そつちの水は

苦いぞ
こつちの水は
甘いぞ。

これなどには極く優しい感情が現れてゐる。或は、兒童が螢を捕へたいといふ私的慾念が混じてゐると云ふものもあらう。然し、この際、慾念そのものも優しいものではないか。

斯の如く、童謠の各種目に亙つて實例を徵したことは、必ずしも悉く藝術的價値に據つたものではない。唯だ童謠の內容となるべき兒童精神の活動の全範圍を知り、これから童謠を研究しようとする人々に些少の資料を提供しようと思つたからである。

明治の教育が、唱歌と軍歌を以て兒童の間から童謠の勢力を驅逐しようと計つた時には、實は童謠の勢力が、といふよりは、童謠そのものが、全國の邊陬の地域まで浸潤し渡つてゐたのである。何故教育家が童謠の驅逐を企てたかと云ふに、多く悪い傾

向の童謠ばかりを聞いてゐたことと、歐化主義の時代精神に影響されて、不熟な飜譯句調の唱歌をこの上ないものと考へてゐたからであらう。彼等には「汽笛一聲」の鐵道唱歌や、「來れや友よ」の散步唱歌が、この上もない藝術的詩歌に見えたのである。感情生活を殺して表面を僞はり飾つてゐた彼等には好い童謠の味はひが判らなかつたのみならず、少女達が無心に謠ふ毬唄にも、耳を聳てないではゐられなかつたのだ。

——お半より聽け
明日は嫁入り

——わたし　母さん
嫁入りは嫌ぢや

——嫌と云うても
ささねばならぬ

——わたし　母さゝ
男がござる

ゴ　誰だと
問ひ詰められて
——向う横町の
米屋の息子
字もよう書く
算　そろばんも……

二階の窓から
三さん呼んで

——何と三さん
どしたらよかろ
死んでよかろか
髪切りませうか

——髪は伸びもの
身は大事　身は大事

かういふ毬唄を歌ひながら、學校の廊下などで少女たちが毬打ちなどしてゐると、彼等は目に角立てて怒つたものである。私は少女等にこれ位の歌を歌はせても差支ないと思ふけれど、然し、まづかういふ種類の童謡は教育者の立場から拒け得るとしても、かういふ毬唄や德川末期の或るもののやうな卑猥な——事實、子供は卑猥な露骨な言葉を好むものであるが——童謡があるといふことの爲めに兒童の感情生活を培ひ育ててゐた童謡を全部驅逐しようとしたことは確かに間違つた料見だつたのである。

好戰時な軍歌や飜譯調の唱歌に依つては、兒童たちの感情の芽が少しも羽含(はぐく)まれなかつたのである。教育者の中にも、兒童の父兄たちの中にも聰明なる先覺者は疾くからこの事に實に氣が付いてゐて、何とか改良したいと考へてゐたのである。それだから、大正の反動時代が來て、童謠が勃興して來た時、それが教育者側からも、兒童の父兄側からも歡迎と後援と支持とを得たのである。

IX

現今、童謠に筆を取つてゐる詩壇の諸家の中で、最も古くから、童謠乃至童謠味の勝つた詩歌に觸れてゐた人は野口雨情と北原白秋の二氏であらう。

西條八十氏も、かれこれ十二三年以前に、「王樣の馬」といふ童謠を發表してゐる。これは「砂金」にも、この「童謠選集」の中には、「鈴の音」と改題して載せられてゐる。

野口雨情氏が十五六年前に上梓された詩集「朝花夜花」の中に次のやうな童謠が收められてゐることは西條氏の「童謠私見」にも見えてゐる。

からす
なぜ鳴く
からすは山に
可愛い七つの
子があれば

北原白秋氏が抒情小曲集「思ひ出」の中に「曼珠沙華」其他童謠味の勝つた作品を載せてゐることも事實である。

兎に角、これらの三人は童謠の先覺者であつて、また最も大なる斯界の功勞者である。

尙、童謠の勃興に盡した功勞者としては、鈴木三重吉氏と泉鏡花氏を擧げなくてはならない。鈴木三重吉氏は大正八年四月、兒童雜誌「赤い鳥」を創刊するに當つて、純

粹に Children songs といふ意味の童謡を現今の兒童たちに與へなければならぬ必要を感じて、西條八十・北原白秋、三木露風氏等に童謡の制作を求めたことは、先見の明があつたと云はなくてはならない。

泉鏡花氏は明治四十二年、「諸國童謡大全」を出版するに際して、橋本繁氏に序を與へ、且つ、「赤い鳥」創刊號には「あの紫は」一篇の童謡を掲載してゐる。

あの紫は
お池の杜若
一つ橋渡れ
二つ橋渡れ
三つ四つ五つ
六つ七つ八つ橋

あの紫は
お姉ちやんの振袖
一つ橋渡れ
二つ橋渡れ
三つ四つ五つ
お姉ちやんの年も
六つ七つ八つ橋

橋本繁氏は「風俗畫報」編輯の傍ら、諸國童謡を輯めて出版し、村尾節三氏も同種の書物を著してある。この二人の努力も、童謡の發達に貢獻したことが少くない。

然し乍ら、童謡のリイネツサンスが恐しく迅速に行はれた原因は、云ふまでもなくこれらの諸家の努力に依るものではあるが、如何に彼等の努力が多大であつたにしろ在來の童謡が一旦全國に浸潤して、また、驅逐された乾燥の地がなく、諸家の努力が

一面に於て在來の童謠の復興に向つて注がれてゐなかつたなら、或はこれほど迅速に燎原の火の如き勢ひを持つには至らなかつたかも知れない。在來の童謠の復興に向つて注がれた努力とは何を指すかと云ふに、私の「船頭の子」と、西條八十氏の「お山の大將」に就いては前章に述べた通りである。北原白秋氏は、「夕燒小燒」「あの山戀し里戀し」其他の民謠及至童謠中の詞句を挿入することに依つて在來の童謠のリヅムを生かさうと努めてゐる。野口雨情氏の「歸雁」は在來の童謠「鴈々」の暗示に依つて創作せられたもので、云ふまでもなく、更に藝術的形式に表現されてゐる。藤森秀夫氏の「山の娶御」の前半には、信州のこれまでの童謠をその儘生かしてゐる。私自身の作品でも、「赤襷」「南瓜」「苗ぞめ」等には、それぞれに古い民謠、或は俚諺、童謠等のリヅムを生かし、更に藝術的形式を與へてゐるつもりである。

次に現今、童謠に筆を染めてゐる諸家の各自の特色と、その人々の主張を紹介しよう。此處では批判を下さうとは思はない。かうした種類の書物の性質上、それは編者として特に避けなくてはならないことだから。そして順序は童謠集出版の年月に隨つ

て試みよう。

北原白秋氏は「トンボの眼玉」の序文の中で、かう云つてゐる。

——あの野山の木萱のそよぎからおのづと湧いて出たと云ふ民謠や、かうした純日本の童謠やが、次第に廢れてゆく心細さはありません。私は一方にさうしたいつまでも新しい、而かも日本人として純粹な鄕土的民謠を復興したいと云ふ考へを持つてゐますにつれて、おなじやうにかうした童謠をも今の無味乾燥な唱歌風のものから元に還さなければならないと思つてゐます。さうしてその本然の心を失はないで、さらに新しい今の日本の童謠をもその上に築き上げなければならないと願つてゐます。……(中略)……私の童謠はただ美しいとか上品とか云ふばかりを主にして居ますのではありません。それに多少物心のついた十三四歲以上の少年少女の謠ひものとしてよりもそれ以下の子供たちに讀ませるもの、それには素朴な混り氣のない子供の感覺といふこと、さうした潑溂とした感覺に根ざしたものから、素裸な子供の心を直接にうつ、さうしたものをと心がけて居りますのです。……(中略)……子供に還ることで

す。子供に還らなければ、何一つこの忝い大自然のいのちの流れをほんたうにわかる筈はありません。

白秋氏の童謡制作に關する意見は大體これに依つて窺はれるであらう。潑剌とした兒童の感覺に還つて、始めて本當に好い童謡が出來るので、子供の感覺に還らないでは、決して好い詩も、好い童謡も書けるものではなく、且つ、大自然の寶庫を開くことが、第一に不可能なことだと云ふのである。

西條八十氏は兒童の感覺に還らうとすることの矛盾と不可能を說いて、童謡の純藝術的制作を主張してゐる。

――私一個として信ずるところを云へば、純藝術的童謡の制作に必要なる第一條件は、小兒の感覺への復歸では無くて、小兒の精神と吾々成人の精神との間の類似(マナロヂー)の發見に在る。(童謡私見)

この點に關し、西條氏は童謡集「鸚鵡と時計」の序文の中で、更に具體的な說明を與へてゐる。

――大人の夢と小兒の夢、その顆珠の色こそちがへ、これを同じに繫ぐ一つの絲のあることを私は信じてゐる。それはひとしく「未知の土(ラ・テール・アンコニュ)」に對するあくがれである。スティヴンソンの童謡中に見る小兒は、より遠き田野を望まんとして櫻の梢に攀ぢ、われわれ大人は更に宏なる精神世界の存在を確かめんとして厚き書物の頁を飜す。未知の鄕に對する好奇、思慕、畏怖の心、この心の惱みを惱みとし、この心の歡びを歡びとすれば、大人は常に小兒であり、小兒はまた大人である。われらが兒童に與へる謡と云つても、それは詮ずるにひとしき目標に繫がる途を、わづかに一歩先んじた者が遲れ來る者を呼び立つる聲か、または共々手をつないで歩みゆく者の勇ましい行進歌であらねばならぬ。……(中略)……童謡詩人としての現在の私の使命は、靜かな情緒の謡によつて、高貴なる幻想、即ち叡智(インテレクチュアル)想像(イマジネイション)を世の兒童達に植ゑつけることである。

更に氏は童謡制作の態度に就いて次の如く語つてゐる。

――私は單に市井の兒童によき謡を與へると云ふ普通の動機以外、更に大人に謡を

與へることによつて、彼等の胸に昔の子供時代の純な情緒を呼び覺ましたいといふ希望からも童謡を書いた。私がかなり難解の詞句と想はれるものをも顧みず用ゐたのはその爲めである。かうした範疇の作は、一面兒童には解せられずとも、ただその響だけ彼等に傳はれば充分であると私は考へた。

これに依つて見るに、西條八十氏は子供に還つて童謡を書かうとしてゐるのではない。飽までも成人の立場に立つてゐて、作者の精神と兒童の精神の類似を發見して童謡を書くといふのである。

惟ふに北原白秋氏の意味するところも、矢張成人の精神と兒童の精神との類似を發見しようとすることが第一で、「子供に還れ」といふことは「自然に歸れ」といふ言葉と同樣の漠然たる意味に用ゐられたのではなからうか。そして吾々成人の精神と兒童の精神との類似の發見せられる場合、成人としての因習的感覺と知識上の經驗が自づから剝落してインノセントな子供の感覺に歸つてゐる時だといふ意味ではなからうか。さういふ刹那に、大自然のいのちの流れを感じ、さういふ刹那に童謡を書きたいと思

つてゐるといふ意味の主張ではなかつたらうか。私は白秋氏の説が、その精神に於てはかういふ意味で述べられたことであつて、唯だ、これまで官能的方面に異色有る詩を描いてゐた人だけに、矢張官能偏重の傾向がひとりでに混淆した形に過ぎないと考へてゐる。

野口雨情氏は最も鄕土的な田園的な童謡を書いてゐる。曾て、雨情氏が童謡制作上の立場を闡明せられた講演には次のやうな意味が含まれてゐたやうである。

——鄕土藝術たる童謡を發達させ、皷吹するには、鄕土の言葉をそのまま取り入れなくてはならない。然しそれにも藝術的な言葉だけを用ゐなくてはならない。私の書いてゐるものは田舍の童謡であるが、それが幸ひ本當の藝術であつたなら、世界の隅に起つた波が全世界に波及するごとく、日本の寶となり、世界の寶となると信じてゐる。更に私は童謡を作るについてはこれまでに習つた色々なことを忘れなくてはならない。そし一童謡には親しみがなくてはならない。その親しみは親しみある人でなくては出來ないと信じてゐる。鄕土は狹いかも知れないが、直接眼にふれ心に泌みてゐ

る。そして藝術に文明・非文明と云ふことはないから、本當の藝術は世界に共鳴すると信じてゐる。日本の土は黑い。海岸線には波が打つてゐる。平凡であるがいつまでも胸に泌みる。童謠は平凡でも好いから永久に飽きないものであつてほしいと思つてゐる。兎に角童謠を作る時だけでも、總ての事を忘れて「アイウエオ」五十音で、麥も、林檎も、茱萸も產れる土の色を見て、作らなくてはならないと思つてゐる。

これに依つて見ると、野口雨情氏の主張は、如何に邊土の藝術であつても、深く人間の心に喰ひ入つたものであつたら、必らず其處に深い人道的精神の流れに合體するものがある。其處には世界的共鳴を喚起するに足るものが在るといふのである。

三木露風氏は、未だ童謠制作に對する態度を發表したことがない。然し、童謠の制作には、矢張、白秋、雨情八十、氏等と共に最も古くから、筆を染めてゐる。そして露風氏の童謠は、作者自身の趣味と高邁なる態度を表現したものが最も多いやうに思はれる。「秣の桶」には作者の欣求の對象に對する憧憬が表れて居り、「駱駝と人」「牧神の笛」等には作者の趣味と異國情緒が認められる。「鷹の目」は、露風氏の詩壇に對

する態度を象徴的に表白してゐる。

鷹は雀に目もくれず
ひとりさみしい羽づくろい
富士の山はいつか消え
青天井はかぎりなし

これなどには作者の高邁なる態度と、それに伴つて來る寂寥感が漲つてゐるやうに思はれる。

其他、藤森秀夫、白鳥省吾、山村暮鳥、若山牧水、島木赤彥、相馬御風、茅野雅子與謝野晶子の諸氏の特色傾向に就いても、詳細に紹介したいけれど、この次の機會に讓つて私自身の童謠制作上の立場を明かにしてこの稿を終へたいと考へる。

私は屢々自(おの)づから成人としての經驗と知識が剝落して、全く兒童の精神と一致する

瞬間を見出すことがある。さうした時の自分の韻律的活動が自然に童謡の形を取つて來るのである。この精神狀態は成人としての自己の忘失する瞬間で、恰も入浴後微風に向つてゐるやうな心理である。かういふ時に私は童謡の興味を覺える。かういふ刹那は私の魂に取つては休養の時間であり、魂が無眼に翼を伸してゐる時だと思はれる少年時代の郷愁(ノスタルヂア)も、かうした時に最も多く現れて來る。私は單にそれだけを童謡に書くことがある。

これが私の童謡制作の心持ちの告白である。然し、成人の精神と兒童の精神と全く一致する刹那の心理は、決して私だけの經驗ではない。多くの藝術家が實驗することだらうと思はれる。西條八十氏が、「吾々成人の精神と兒童の精神との類似(アナロヂー)の發見」と云つたのも、實はこの刹那の心理の發見を意味してゐるのであらう。この刹那の心理は、屢々、多くの思想家や藝術家の創作と評論の中で、詳細に説明されてゐる。ドストエフスキーの「白痴」の中に、主人公ムイシュキン公爵が瑞西(スヰツル)の子供たちと遊んでゐた時の經驗を語るところがある。「子供たちは大人の知つてゐることは悉く知つてゐ

る。だから、子供たちに對しては、何も隱し立てをする必要はないのだ。」と、かういふ意味のことを「白痴」の主人公は述べてゐる。ドストエフスキーが或る事業の失敗から、莫大な負債を生じ、ロシアを逃亡して瑞西に旅行してゐたことがあつて、その當時の自己の經驗を此處に織り込んだものだらうと云はれてゐるから、この「白痴」の主人公の見解を直ちにドストエフスキーの見解と見られないこともないのである。また、大人の精神と兒童の精神と全く一致し、大人の心靈と兒童の心靈と距てなく交通する狀態に就いて、エマスンは「大靈論」(the Over-soul)の中で次のやうに説いてゐる。

「子供に對しては希臘語も羅甸語も何の役にも立たない。彼等と交通し得るものは心靈のみである。必ずしも言葉はこれと同一ではないが、かういふ意味のことを述べてゐる。」吾々成人が希臘語や羅甸語の知識の桎梏を脱して、心靈に於て兒童の精神と相觸れる時、詩人に童謡制作の權能が與へられるのである。この心靈の交通の或る場合に關し、私は曾て全く別の方面から、吾々の祖先の知識と經驗の潛在記憶が發現することを説いたことがある。

吾々を一個の人間にまで發育させた心靈の一滴は、人間が單生動物であつたといふ遠い昔からの總ての祖先の生命の結晶である。それらの限りなき祖先の人々の經驗と知識が、一種の潛在記憶となつて吾々に傳はつてゐる。假に人間が二十五歳で一兒を擧げるとして、現に生れたばかりの嬰兒の祖先を過去二百五十年まで遡つて計へて見ると、實に四〇九四人の祖先を有することになるのである。

今、生れたばかりの嬰兒には現在二人の親がある。二十五年前には、親の親が四人ある。五十年前にはその親が八人、七十五年前にはまたその親が一六人、百年前にはその親が三二人、二百年前にはその親が五一二人、二百五十年前には、またその親が二〇四八人になる、二十五年毎に增加して行くこれらの祖先を合して過去二百五十年まで遡つて見ると、現に生れたばかりの嬰兒の祖先が四〇九四人の多きに達するのである。勿論、これは一箇の假想的計算であるから、正確な數字ではないが、大體の見當はこれで付くだらうと考へる。

兎に角、これらの多くの祖先の經驗と知識の集積が、生殖作用を通過する際に、ま

るつきり無くなつてしまふものだとは何うしても思はれない。恰も、肺病患者の子孫に腺病質な子供が出來るやうに、祖先の經驗と知識の集積が凝縮するか融解するかして、一種の潛在性のものとなつて、吾々の意識の底に流れ傳はつてゐるものだらうと考へる。青年が老人の心理を如實に描破して、傑れた藝術的作品を創作し得る狀態なども、この潛在記憶の發現に依ることが少くないだらうと考へる。云ふまでもなく傑れた天分と周密な觀察だけに依つて、成し得ることだと云へないことはない、然し、それにしても、天分そのもの、觀察作用そのものの中に、この潛在記憶の發現がないであらうか？　吾々は、時に依つて、全く初めて出會つた人に對してすら、遠い昔に知合であつたやうな不思議な心もちを感ずることがある。かういふ場合などにも、祖先と祖先との交通の不思議な潛在記憶が甦つて來るのではなからうか。私は、多くの祖先の幼時の經驗と本能的興味の潛在記憶が、吾々の意識の表面に、韻律的活動を伴つて甦つて來る場合を信ずる。さういふ際にも、童謠が書けると考へる。

かういふ潛在記憶の發現、或は、エマスンの云ふ意味の心靈の交通を信じないもの

にも、父と子の間に會話が出來ることは否定出來ないであらう。而も、それが何等不純なものを混へてゐず、第一義的生活の一狀態であることも否定出來ないであらう。その事實を認める限り、詩人に童謠制作の權能があり、それが少しも第二義的なものでないことを認めなくてはならないやうに思はれる。

私はかういふ信念の下に童謠を書いて來たのである。

XII

最後に童謠は、十二三歳の兒童には彼等が汲み取り得るだけの意味で面白く、二十歳の青年には更に深い鑑賞の對象となり得るもので、六十歳の老境に於て顧みても、更に深い意義を發見し得るものでなくてはならない。私が「電車の客」といふ童謠を書いた時、兒童たちには、單にユーモラスな興味があり、吾々成人の精神に向つては、何處かに動物と人間との間の或る一致（アイデンティティー）相を聯想せしめる効果がありはしないかと考へた。私自身としても、今から見ると、部分々々には、何とか改作したいところもあ

るけれど、此處には、單に雛形として書き留めて見る。

電車の客を見てゐると
水族館を思ひ出す

痞せてほつそり立つんは
ほつそりのつぼの痞せ鰤（かます）

顏のべちやんこな
平目もどざる

おくさまがたの掌（て）の指は
波間の　波間の白魚でせう

お髪の上には
榮螺もござる

伊達の襟巻　小窓の風に
ひらひらと鯛の鰭

電車の客を見てゐると
みんな魚に似てゐます

前にも云つたやうに、部分々々には多少氣に入らぬところもあるが、子供たちには單に面白く、青年に對しては、人間と動物との間の或る一致相から、萬有神教的な心もちを喚起しはしないだらうかと、窃かに思つてゐる。

お月さん
空の
ひとりたび

お腹が
空いては
歩けまい

お月さん
前に
鰯雲

お月さん
横に

飛びの魚

お腹が
空いたら
召し上れ

これは「お月さん」と題する私の童謡であるが、空を行く月に對する兒童の心もちがよく現はれてゐるやうに思つてゐる。詩として見ても、擬人法の形が稍古い感じを與へるけれど、或る大きさは持つてゐる。

雉子の
めんどり
ほろろ
鳴く

背戸の
薄の
原の
中

聽けと
云うても
母
ばかり

萬字
巴に
砧

二三人の兄妹か友だちに圍まれながら、無暗矢鱈に砧を敲いてゐる母の傍に立つて背戸の薄の原の中の雉子の聲に耳を傾けてゐる少年の寂しさが出てゐはしないだらうか？　詩として見ても、極く簡潔な表現の中に、或る場景の描寫と、情緒の流れが、はつきりと出てゐるやうに思はれる。「雉子」と題するこの童謡も、自分の好きなものの一つである。

此處に掲げた私の作品は必ずしも私の所論に添ふものでないかも知れない。然し、童謡は兒童たちに對しては、彼等が汲み取り得る意味で面白く、成人に對しては、更に深い鑑賞の對象となり得るものでなくてはならぬといふ所論は、決して間違つてはゐないと考へる。作家の方々にも、讀者諸君の中で、特に興味を持つてゐる人々にもさういふ心もちで童謡制作に筆を染められることを私は希望する。私自身も、さういふ深い内容の有る童謡が出來たら好いと思つてゐる。（完）

後序

大正時代の詩壇に於て、最も目醒しい現象は、童謡の勃興だらうと思ひます。兒童にはよき謡を與へ、成人に向つては、譬ひ一瞬にもせよ、彼等の眠れる魂の底から、純一な少年時代の記憶を喚起して、眞に人間としての美しさや、藝術の尊さを意識させようとする童謡の勃興、乃至復興運動は、可也大なる文化的價値を持つてゐたと云はなくてはならないと思ひます。

あらゆる詩人が童謡に筆を染め、それが教育者の側からも、兒童の家庭からも、常に溫かな同情と後援と支持とを得たといふやうな時代は、世界の何れの國の文學史上にも、類例を見ない特異な現象だと考へます。かうした時代の全幅の光景と、この運動の全體を一冊の書物の中に綜合して殘して置くことは、後日尊い文獻事業と認められるに違ひないと考へます。

本書は世の兒童達に讀ませるといふことよりは、童謡に興味を持つてゐる大人に提

供する考へで編纂したものです。教育上の立場から興味を持つてゐる人々にも、單に理由なく詩を愛好する人々にも、忙しい仕事のかたはら、童謠を書いて見ようと思つてゐる人々にも、その外、何ういふ理由からでも、童謠に興味を持つてゐる人々に、童謠の勃興してゐる現在の狀態と、外國の童謠と日本の童謠の比較と、日本の古代からの童謠の變遷の模樣を知らせたいと思つて編纂したものです。

巻頭の西條八十の「童謠の比較研究」は外國の童謠の眞髓を示したものであり、巻末の西川勉の「童謠の歴史的考察」は、古事記の「腰裳服せる少女の歌」から大正時代に到るまでの日本童謠の歴史的綜合研究です。

これまで童謠に筆を染めた各作家が、尊い作品の轉載を御承知下さつたことと、初山滋氏が、お忙しい間にも拘らず、本書の裝禎と扉の繪を書いて下さつたことと、佐佐木左作氏が快く數葉の挿繪を書いて下すつたことと、佐佐木左作氏が快く數葉の挿繪を書いて下さつたことと、本居長世氏と成田爲三氏が作曲の轉載を快く承諾して下すつたことは、編者の篤く感謝するところです。

大正十年九月十五日

編　者

目次

西條八十
童謠の比較研究（英國の童謠に就て）……一
伊藤燁子
凧……二
おいてきぼり……三
ゆきはよいよい……四
林信一
きつねの火……八

お池の金魚……九
山　彦……一〇

濱田廣介

赤い實……一四
四十雀……一五
いたち……一七

西川勉

猿の酒……二三
笹　舟……二四
夏……二六
船頭の子……二七

猫と紙ぶくろ……二九
貝づくし……三〇
だるま……三三
夢……三三
電車の窓から……三五
あはれ　無心の小鳥よ……三七

茅野雅子

ぶうらんこ……四二
しやぼん玉……四四
春風のうた……四五
私のお家……四七

小川未明

海と太陽……五一
紅い雲……五三
赤い鳥……五五

若山牧水

春の雨……五八
ちいさな鶯……五九
雪よ來い來い……六一
はだか……六二
雲雀……六三
たんぽぽ……六四

春の日向……六五

加藤まさを

星の糸……六八
お手玉……七〇
棚……七二
天の祭壇……七三

川路柳虹

小鳩……七八
冬の鳥……七九
枯木と風……八一

與謝野晶子

太陽の船出……八六
花を摘む……八八
啄木鳥……九〇
願ひ……九二
お猿……九三

相馬御風

秋のつばめ……九八
露と蟲……九九
月の兎……一〇一
來い來い螢……一〇二

若葉……一〇四

内藤鋠策

畑のでんでんまひまひ……一〇八

井上康文

七つの小山……一一三
赤いリボンと黒い帽子……一一四
めんない千鳥……一一五

野口雨情

蜀黍畑……一二〇
十五夜お月さん……一二一

お春戸の藪……一二三
烏の小母さん……一二四
燕……一二六
山椒の木……一二七
四丁目の犬……一二八
鵬と雀……一三〇
鵬の嫁入り……一三一
歸る雁……一三〇

大關五郎

謎……一三六
丘の上……一三七
水車……一三八

柳澤健

碧眼の人形……一四一
冬……一四三
夕暮……一四四
海のあなた……一四六
春の風……一四七

山村暮鳥

田圃にて……一五〇
昔がたり……一五一
鰹釣り……一五一
烏刺し……一五三

毬うた……一五四
はねつるべ……一五六
海邊にて……一五八

前田春聲

王子の旅……一六二

松山二郎

動物園テニス……一六六
動物園觀兵式……一六八

福田正夫

小鳥……一七二

星の歌……一七四

藤森秀夫

山の娶御……一七八
桑……一七九
月が一人……一八一
父さんどうぞ……一八二
峯の春……一八四
めえめえ兒山羊……一八五
鷺殿……一八七

西條八十

かなりや……一九〇

鉛筆の心……一九一
夕　顔……一九三
お菓子の家……一九五
山の母……一九七
玩具の舟……一九九
木のぼり太右衛門……二〇〇
蟻……二〇一
お山の大將……二〇三
鈴の音……二〇四

齋藤正雄

昔のお嘶……二一〇
毛糸の靴……二一一

陸の船長……二二三
爺さん鍛冶屋……二二四
侏儒の舟……二二五

北原白秋

お　祭……二二八
のろまのお醫者……二二三
雨……二二六
りすりす小栗鼠……二二八
舌切雀……二二九
物臭太郎……二三二
隣同士……二三三
白い木のかげに……二三四

雪のふる晩……二三五
赤い鳥　小鳥……二三七

水谷勝

きりぎりす……二四〇
葱坊主……二四一
とんころりん……二四三

三木露風

秣の桶……二四六
駱駝と人……二四七
鷹の目……二四九
黄金の泉……二五一

雨の音……二五三
青い湖水……二五五
追風……二五七
道草……二五九
かつこう……二六一
牧神の笛……二六三

白鳥省吾

秋の日……二六八
鰐の子の新年……二六八
最初の光……二六九
黒い雀　白い雀……二七一
雲雀の巣……二七三

飛行機……二七五
小犬のライちゃん……二七七

澁澤青花

春の雪……二八〇
春の歡び……二八一
かたつむり……二八三
入道雲……二八四
僕の電車……二八五

島木赤彦

杉……二八八
仔犬……二八九

金魚賣……二九〇
柿の木……二九二
雀……二九三
あられ……二九四

霜田史光

お星さん……二九八
雨の唄……二九九
ほほじろ……三〇〇

西川勉

童謡の歴史的考察……一

初山滋
無題（装幀）……（表紙）
星の子（畫）……（扉）
佐々木左作
胡瓜提灯（畫）……（口絵）
鐘（畫）……一
笹舟（畫）……三
本居長世
お山の大將（曲）……一
歸る雁（曲）……三

成田爲三
雨（曲）……五

「日本童謠選集」
定價貳圓八拾錢

大正十年九月二十八日印刷
大正十年十月一日發行

著者　西條八十
著者　西川勉
發行者　東京市牛込區早稲田鶴巻町四三九番地　小柴權六
印刷者　東京市牛込區早稲田鶴巻町四三九番地　鶴田理治
印刷所　東京市深川區古石場町二十四番地　三功舍

發行所　東京市牛込區早稲田大學前　稲門堂書店
電話番町一二九八番
振替東京一五五番